

学内広報

2013.3.11

no. 1436



特別号

2011年度大学教育の達成度調査

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、教育企画室の委託を受け、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第4回目にあたり、平成24年3月に平成23年度の卒業生3,161名を対象として実施し、2,468名から回答をいただき、回収率は約78%であった。調査の実施には各学部にも多大な協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に、東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善に様々な形で活用している。今回、特に、秋季入学や学生の国際活動経験や転部経験に関する分析を行ったので、本報告書では、その報告も行う。その他については、前3回と比較して、今後より一層の分析を続け報告していく予定である。

今回は4回目の試みであり、回収率は上昇しているものの、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関しても、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生諸氏の調査へのご協力をお願いしたい。

平成25年3月
大学総合教育研究センター長
吉見俊哉

調査実施方法

- アンケート送付日 : 平成24年3月23日(卒業式)
- 卒業生数 : 3,161票
- 有効回答数 : 2,468票
- 回収率 : 78.1%(回収率は、有効回答数/卒業生数で計算した)

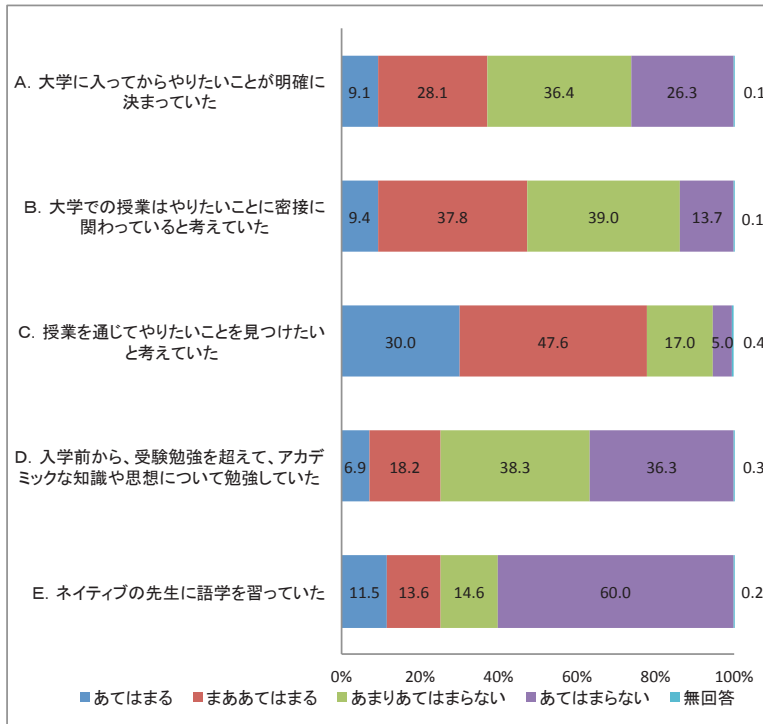
※学部(各学科)が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布し、以下のAおよびBの方法で回答・回収した。

- A. 自記による回答後、各学部が回収(法、工、文、理、農、経済、教養、教育、薬)
- B. 自記による回答後、大学総合教育研究センターに郵送(医)

※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して100%にならない場合がある。

やりたいことが明確：約4割、授業を通じて見つけたい：約4分の3

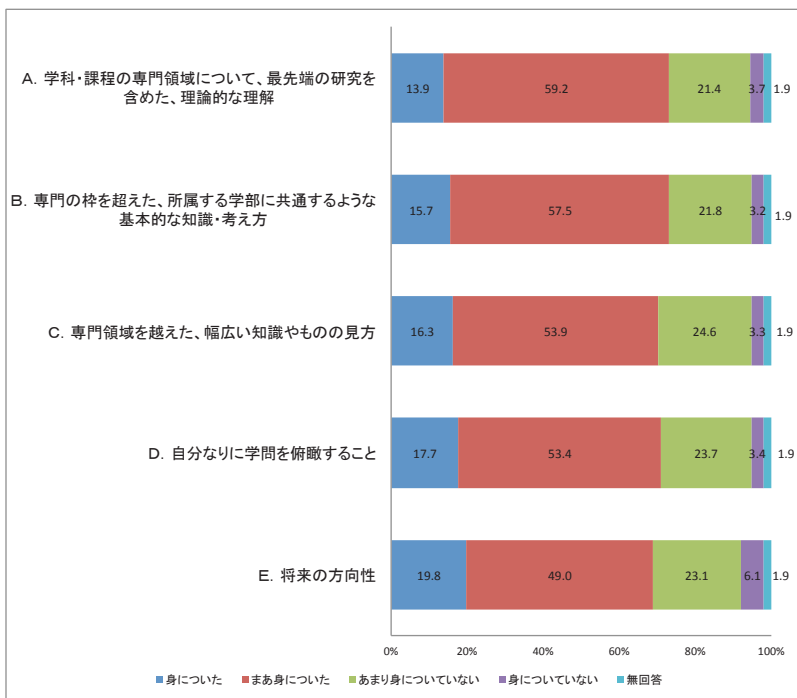
Q 8 入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。



「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせて37.2%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」（47.2%）学生はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つけないとと考えていた」が4分の3以上（77.6%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴である late specialization に沿った学習志向性を持っていた。これに対して、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」（25.1%）や「E. ネイティブの先生に語学を習っていた」（25.1%）と、入学以前に受験以外の学習をしていた学生は、4分の1となっている。

「最先端の理論的理解」、「学部に通ずる基本的な知識・考え方」、「幅広い知識やものの見方」、「学問を俯瞰」を身につけた学生は7割以上

Q 9 あなたは、東京大学の教育を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

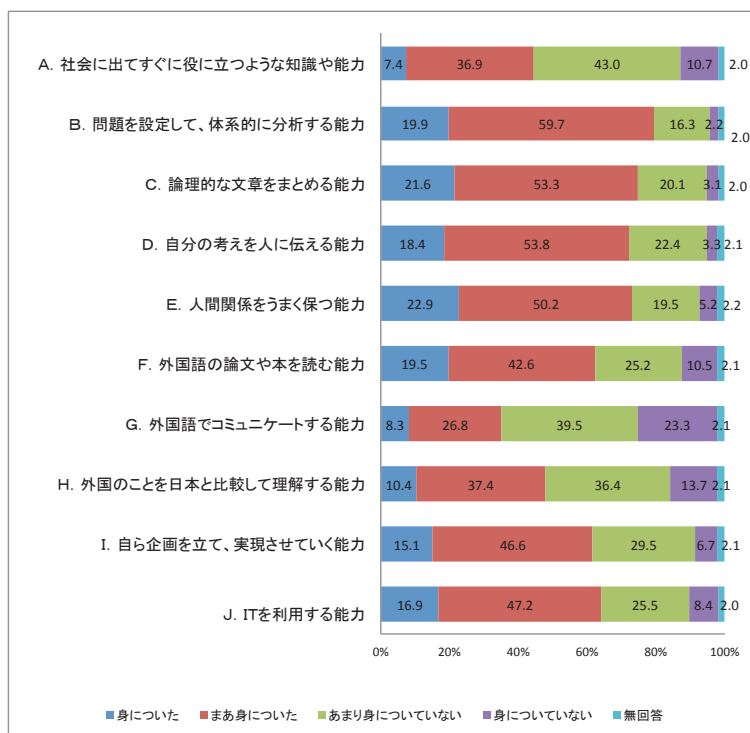


学生が東京大学の教育を通じて身につけたと自己評価しているのは、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた、理論的な理解」（「身につけた」と「まあ身につけた」を合わせて73.1%、以下同じ）、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通ずるような基本的な知識・考え方」（73.2%）、「C. 専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」（70.2%）、「D. 自分なりに学問を俯瞰すること」（71.1%）で、大学教育の2つの目的、すなわち専門的な深い能力と幅広い能力が、「身につけた」と「まあ身につけた」を合わせて、いずれも7割以上である。しかし、「身につけた」のみではいずれも2割以下となっている。

外国語の論文や本を読む能力が身についた学生は6割以上

外国語でコミュニケーションする能力が身についた学生は約3分の1

Q 10. あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

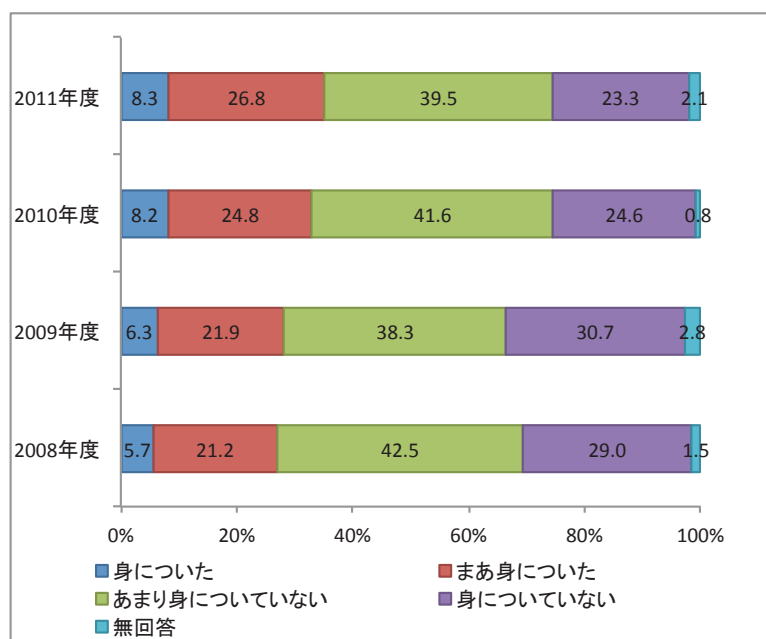


学生が大学時代を通じて身についたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」と「まあ身についた」を合わせて79.6%、以下同じ）、「C. 論理的な文章をまとめる能力」（74.9%）、「D. 自分の考えを人に伝える能力」（72.2%）、「E. 人間関係をうまく保つ能力」（73.1%）といった汎用性の高い一般的な能力であり、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている学生は約4割(44.3%)に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は約3分の2（62.1%）の学生が身についたとしているのに対して、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとしている学生は3分の1（35.1%）に過ぎない。

※今年度の調査で新たに「外国のことを日本と比較して理解する能力」を加えた。「身についた」学生は10.4%、「まあ身についた」学生は37.4%で合わせて47.8%の学生が身についたとしている。

外国語でコミュニケーションする能力が身についた学生は少しずつ増加

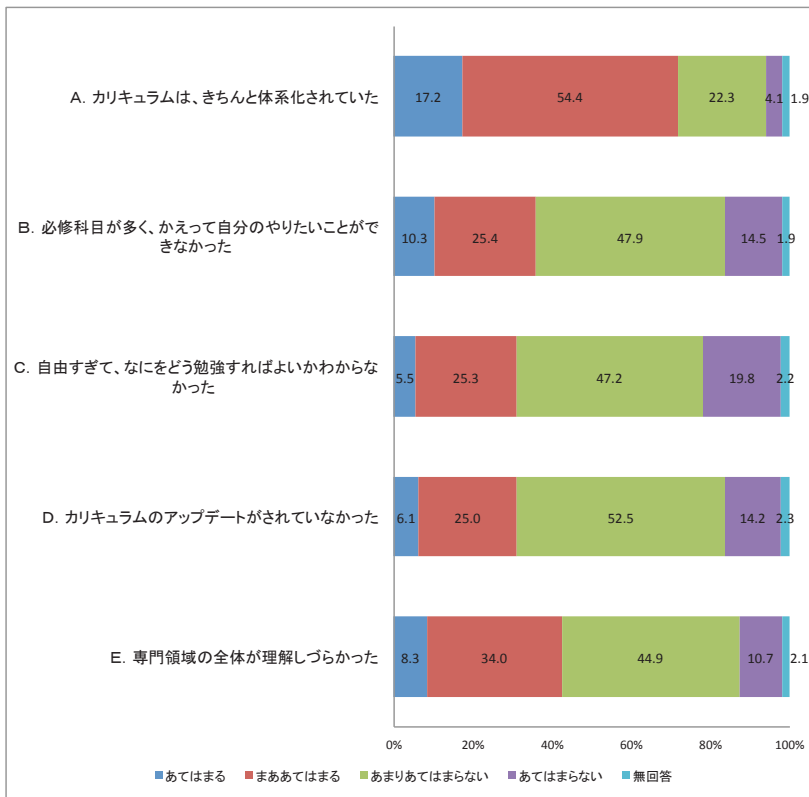
「Q10 G. 外国語でコミュニケーションする能力」の推移



※上記の身についた能力については、前年度調査までとほとんど同じ比率で推移している。しかし、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、左図のように、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきている。

カリキュラムについては肯定的な回答が多いが、約3割の学生は評価していない。特に「専門領域の全体が理解しづらかった」という学生は約4割

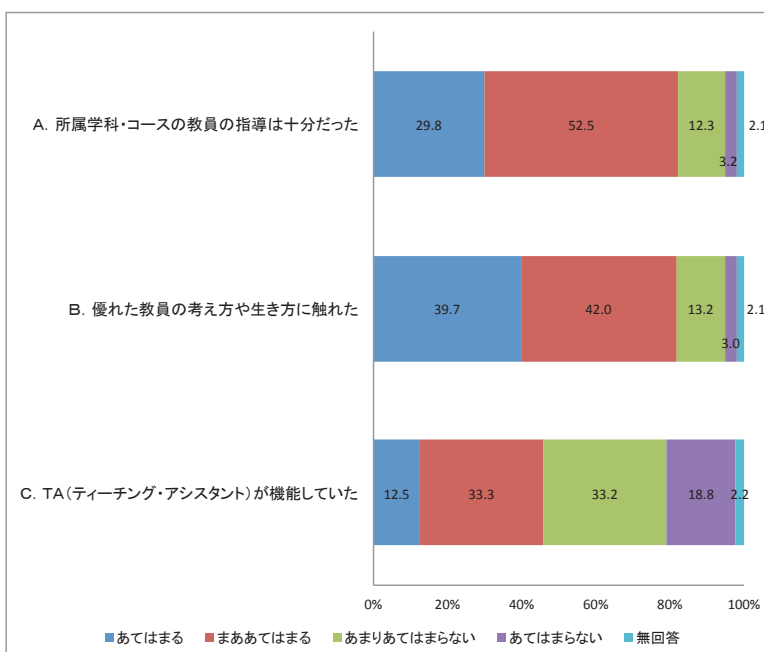
Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



カリキュラムについては、「A. カリキュラムは、きちんと体系化されていた」とする学生が、71.6%と7割を超えている。「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった。」(35.7%)「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」(30.8%)、「D. カリキュラムのアップデートがされていなかった」という否定的な評価項目について「あてはまる」と「まああてはまる」とする回答は約3割(31.1%)であり、全体として約7割の学生は肯定的に評価している。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」という学生も約4割(42.3%)となっている。

8割の学生が「指導は十分」、「優れた教員の考え方・生き方に触れた」

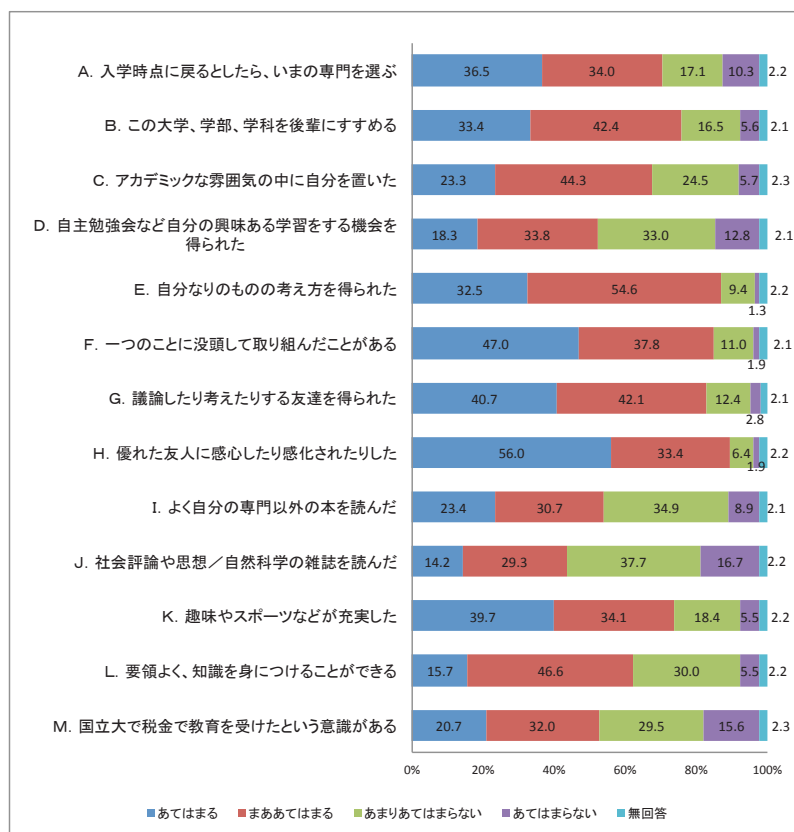
Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。



「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」(82.3%)で「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」(81.7%)が8割を超えている。反面、「C. TA(ティーチング・アシスタント)が機能していた」と評価するのは45.8%と半数以下となっている。

「友人から感化」、「自分なりのものの考え方の習得」：9割「友人と議論」：8割

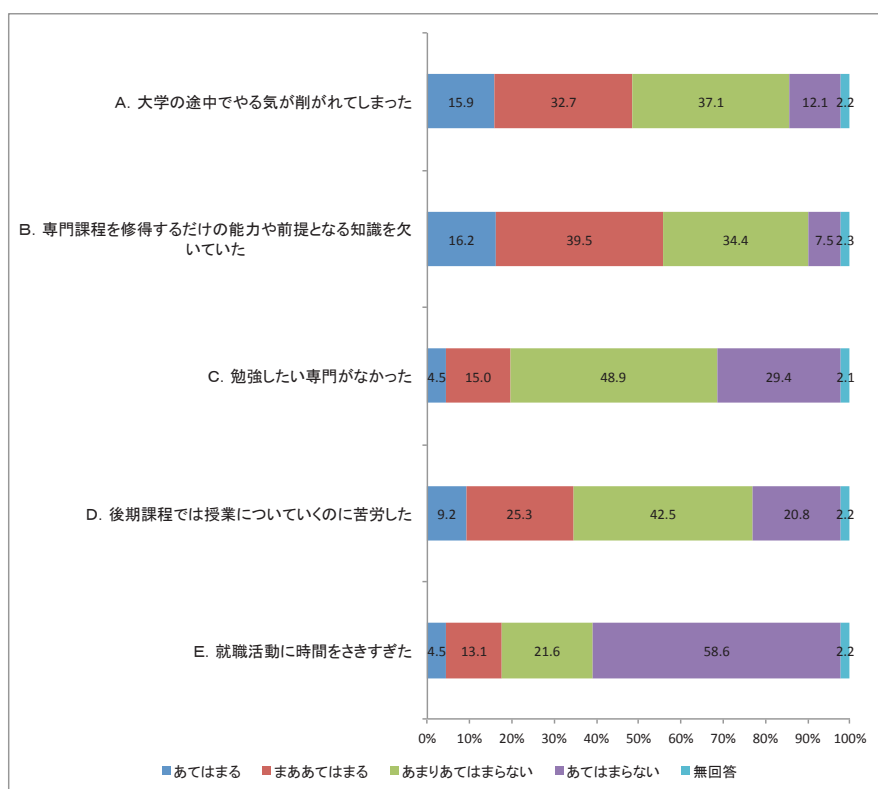
Q13 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。



大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」(89.4%)、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」(87.1%)でいずれも約9割となっている。また、「F. 一つのことについて没頭して取り組んだことがある」(84.8%)、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」(82.8%)という学生も8割を超えている。ただし、「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」(70.5%)と「B. この大学、学部、学科を後輩にすすめる」(75.8%)はやや少なくなっている。また、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」(54.1%)は半数以上、「J. 社会評論や思想／自然科学の雑誌を読んだ」(43.5%)学生の割合は、約4割である。さらに、「M. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」(52.7%)という学生も約半数にとどまっている。

5 割弱の学生が「大学の途中でやる気が削がれてしまった」

Q14 あなたは、大学時代につぎのような経験がありましたか。

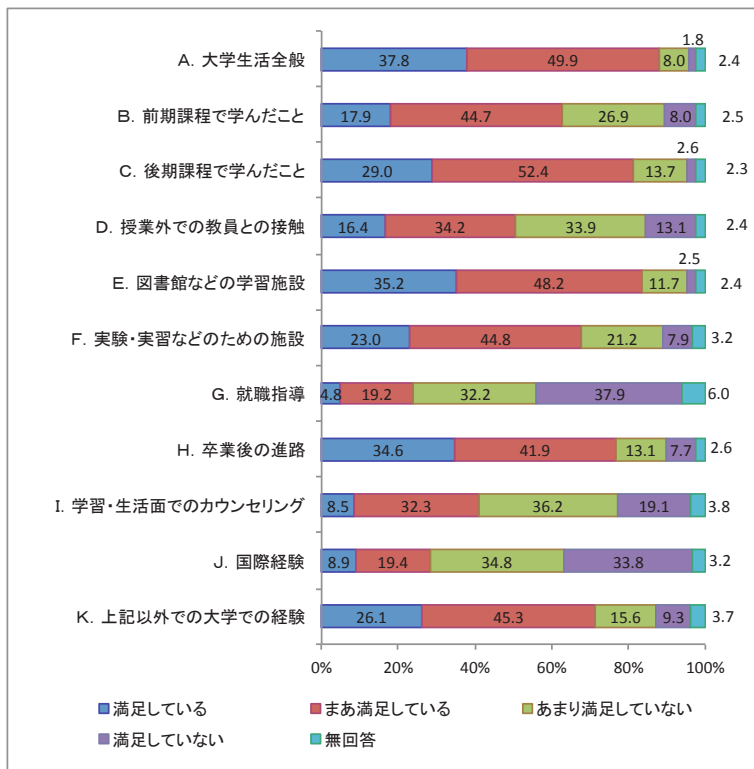


大学時代の否定的な経験としてあげられたのは、「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」(55.7%)で、半数以上があてはまるとしている。また、「A. 大学の途中でやる気が削がれてしまった」(48.6%)学生も約半数になっている。これに対して、「C. 勉強したい専門がなかった」(19.5%)という回答は2割以下になっている。

なお、「E. 就職活動に時間をさきすぎた」(17.6%)については、4月からの予定を「Q30 働く」(後述)とした学生に限ると36.6%となる(グラフ省略)。

満足度：「大学生活全般」9割、「前期課程」より「後期課程」の方が高い 「就職指導」への満足度は低いが、「卒業後の進路」についての満足度は高い

Q15 あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きします。

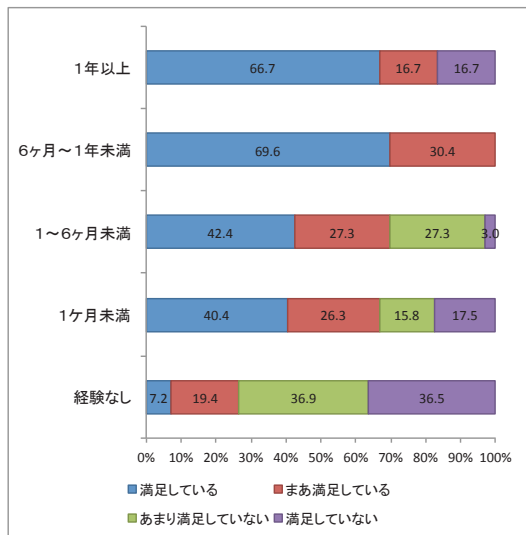


「A. 大学生活全般」に満足している学生は「満足している」と「まあ満足している」を合わせて87.7%と9割に近い。「B. 前期課程で学んだこと」(62.6%)は約6割、「C. 後期課程で学んだこと」(81.4%)と「H. 卒業後の進路」(76.5%)は約8割が満足している。満足度が低いのは、「G. 就職指導」(24.0%)で約4分の1の学生しか満足していない。進路によってほとんど差はみられない。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」(40.8%)も4割の学生しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」(50.6%)についても、満足している学生は約半数に過ぎない。

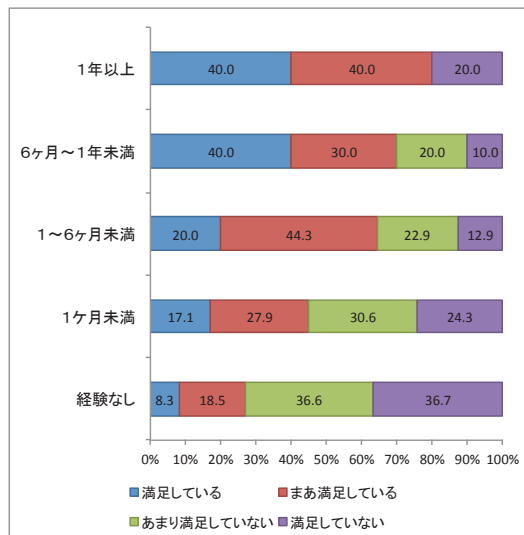
※今年度の調査で新たに「J. 国際経験」を加えた。「満足している」8.9%、「まあ満足している」19.4%で、合わせても3割(28.3%)に満たない。

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

「Q 21 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q 15 J. 国際経験」の満足度



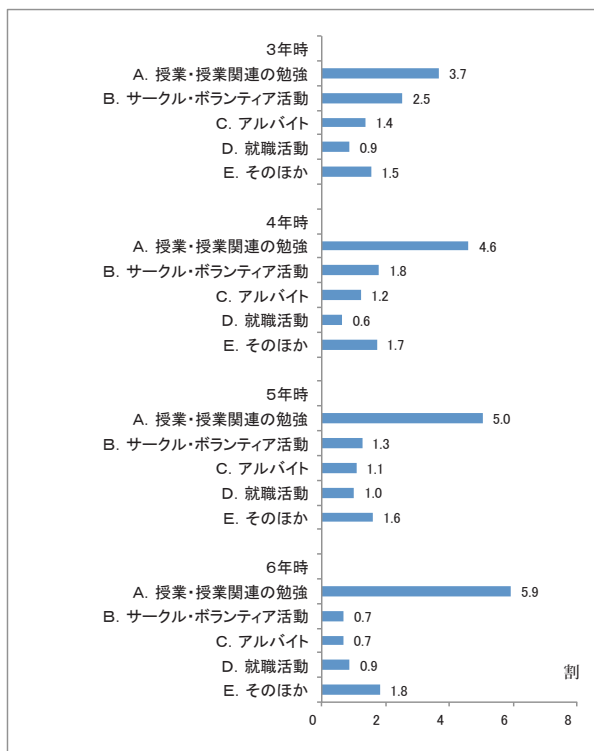
「Q 21 B. 個人留学した(語学学習)」と「Q 15 J. 国際経験」の満足度



左の図は、後述の「Q21 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15 J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、経験期間が長くなるほど満足度は高まっている。右の図は、同じように、「Q21B. 個人留学した(語学学習)」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、経験期間が長くなるほど満足度は高まっている。

時間配分：「授業・授業関連の勉強」に力を入れている、4年生でさらにその傾向は強まる

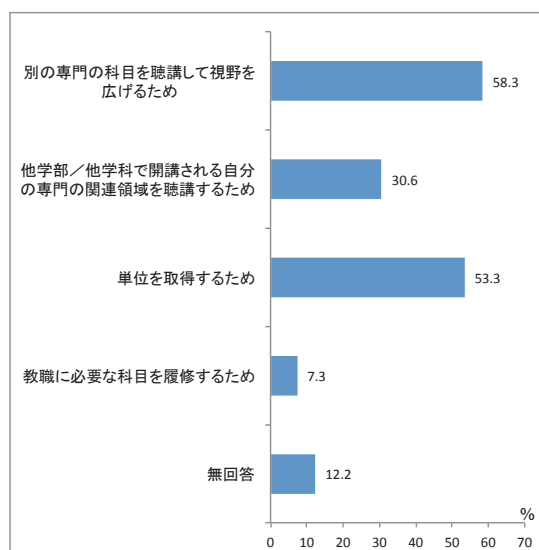
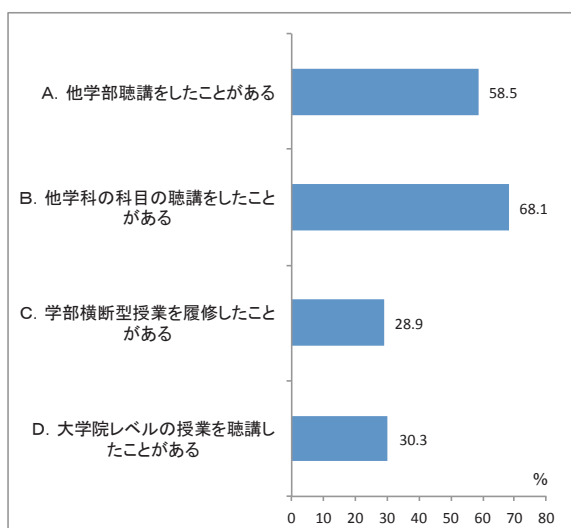
Q16 あなたは、次のような項目に、時間をどのように配分していましたか。試験を除く、学期中の典型的な週を思い出して、()の中に数値を書いてください。



生活時間については、左図の「A. 授業・授業関連の勉強」から「E. そのほか」まで、5つの項目について、全体を10割としてそれぞれの項目の割合をたずねた。この割合の平均で見ると、学生が最も時間をさいているのは「A. 授業・授業関連の勉強」で、3年時で生活時間の約4割弱(3.7割)、4年時には4割強(4.6割)をさいている。これに対して「B. サークル・ボランティア活動」は3年時には約2割強(2.5割)をさいているが、4年時には2割以下(1.8割)に減少する。ただし、これはサークルやボランティア活動をしていない学生も含めた平均である。就職活動には1割以下の時間(3年時0.9割、4年時0.6割)しか使っていないが、4月からの予定をQ30(後述)で「働く」とした学生に限ると、3年時1.9割、4年時1.4割となる(グラフ省略)。

「他学部聴講」の経験者は約6割、「視野を広げる」ための聴講が約6割

Q17 他学部聴講についてお聞きします。



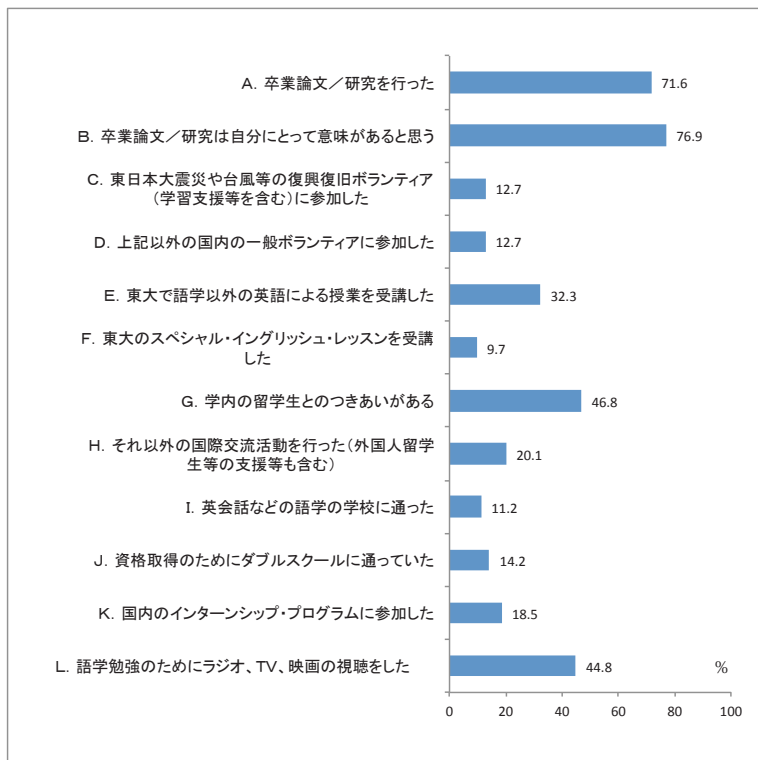
左図のように、「A. 他学部聴講をしたことがある」学生は過半数(58.5%)、「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」学生は、約3分の2(68.1%)となっている。

※今年度の調査で新たに「C. 学部横断型授業を履修したことがある」と「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」を加えた。前者は約3割(28.9%)、後者も3割(30.3%)となっている。

「他学部・他学科聴講」の意図は、右図のように「別の専門の科目を聴講して視野を広げるため」が58.3%と最も多くなっているが、「単位を取得するため」も53.3%と半数を超えている。

「卒業論文の意味を感じる」学生：約4分の3 「東日本大震災ボランティア」は約1割

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。



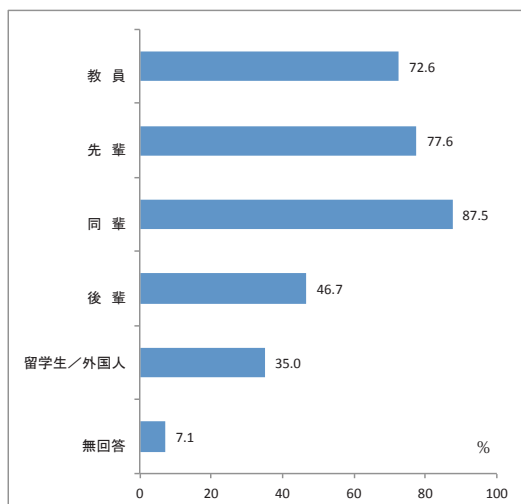
在学時の学習機会・経験として、高く評価されているのは「A. 卒業論文/研究を行った」(71.6%)と「B. 卒業論文/研究は自分にとって意味があると思う」(76.9%)で7割を超えている。また、「G. 学内の留学生とのつきあいがある」は46.8%、「L. 語学勉強のためにラジオ、TV、映画の視聴をした」は44.8%、「E. 東大で語学以外の英語による授業を受講した」は32.3%、「H. それ以外の国際交流活動を行った(外国人留学生等の支援等も含む)」は20.1%となっている。

※今年度の調査で新たに「C. 東日本大震災や台風等の復興復旧ボラン

ティア(学習支援等を含む)に参加した」を加えた。経験のある学生の割合は12.7%となっている。また、「D. 上記以外の国内の一般ボランティアに参加した」も12.7%となっている。

「教員との学問的交流」は、約4分の3 「同輩」約9割、「先輩」約8割、「後輩」約5割

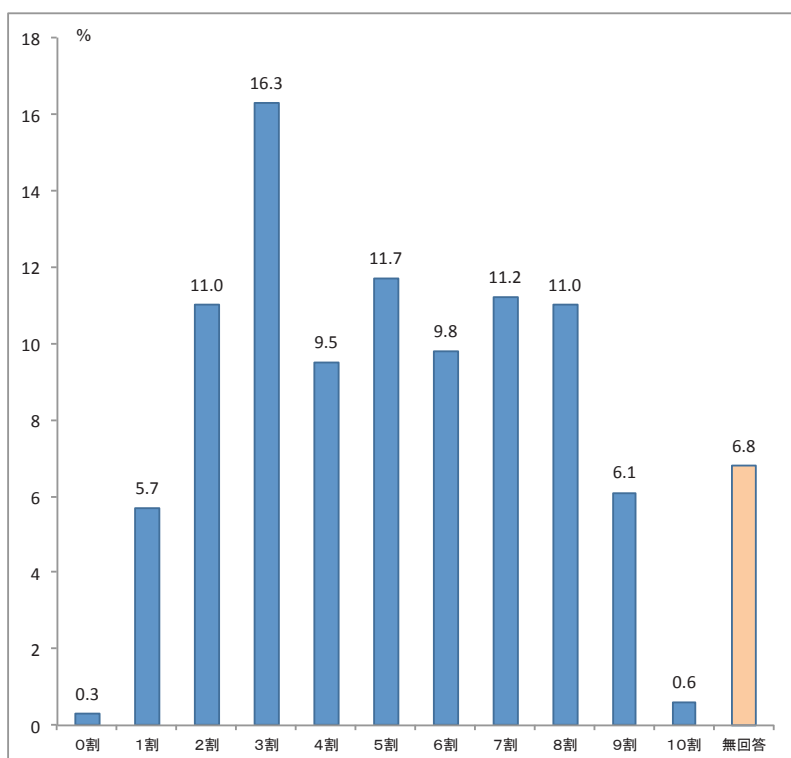
Q19 あなたは、次のような人と学問的な交流がありましたか。



最も学問的な交流があったのは、「同輩」で約9割(87.5%)、次いで「先輩」が約8割(77.6%)、「教員」が約7割(72.6%)となっており、「後輩」は半数以下(46.7%)、「留学生/外国人」は4割以下(35.0%)にとどまっている。

「優の割合」は3割が最も多く、次いで5割

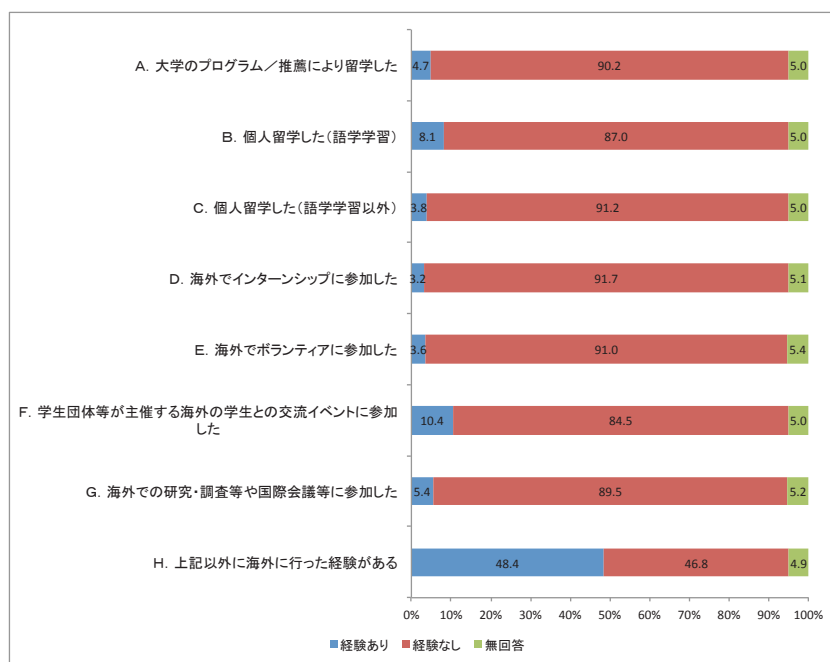
Q20 あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。数値を()に記入してください。「優上」や「秀」などの優以上を含めた割合をお答えください。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が最も多く、次いで「5割」となっており、正規分布ではなく、右に歪んだ分布になっている。しかし、「7割」と「8割」もやや高い割合を占め、平均では、4.9割となっている。

「国際活動経験」では、「大学のプログラム／推薦により留学」は4.7% 「個人留学（語学学習）」が8.1%

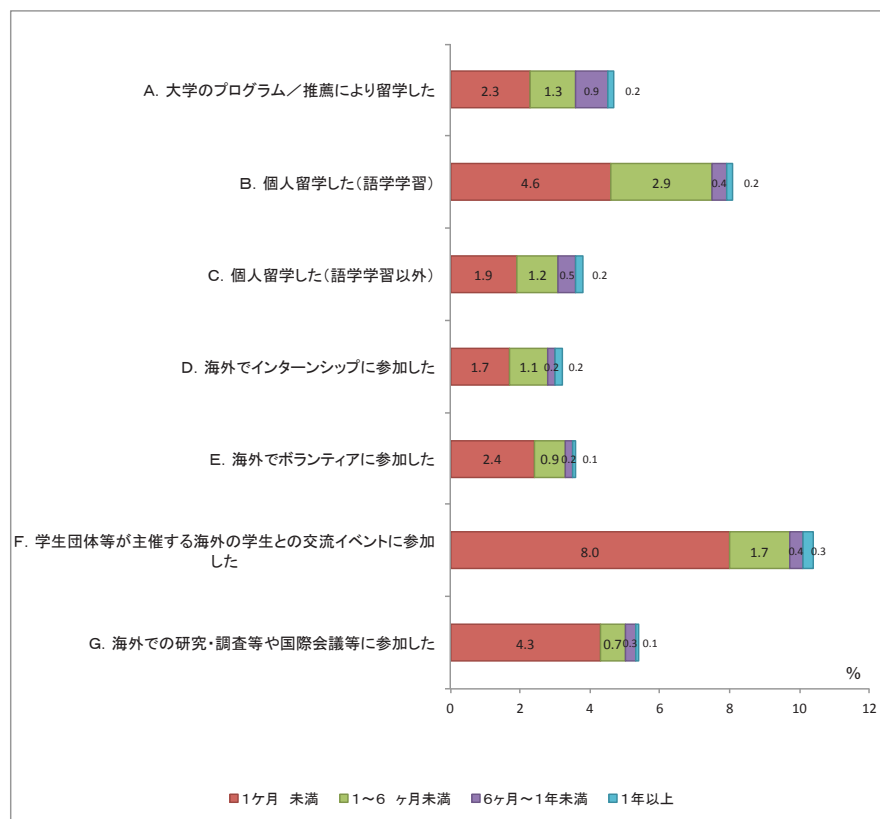
Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



この質問は前年度調査と質問形式を変更しているため、前年度と比較できない。「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」学生は4.7%、「B. 個人留学した(語学学習)」は8.1%、「C. 個人留学した(語学学習以外)」は3.8%、「D. 海外でのインターンシップに参加した」は3.2%、「E. 海外でボランティアに参加した」は3.6%となっている。「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、比較的高く10.4%となっている。「G.

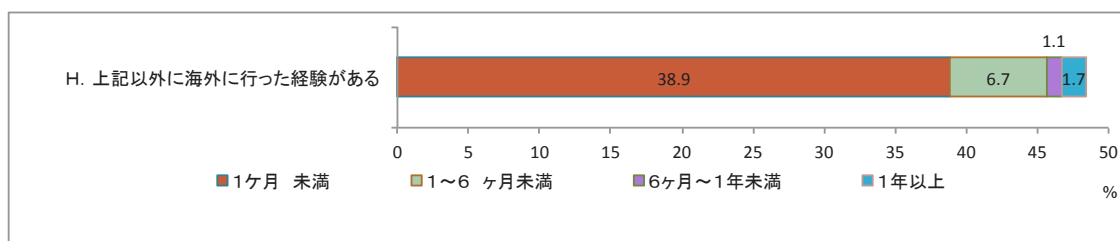
海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は5.4%、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は48.4%と半数に近い。

「国際活動経験」のある学生は半数を超えているが、単に「海外に行った経験がある」者を除くと26.1%



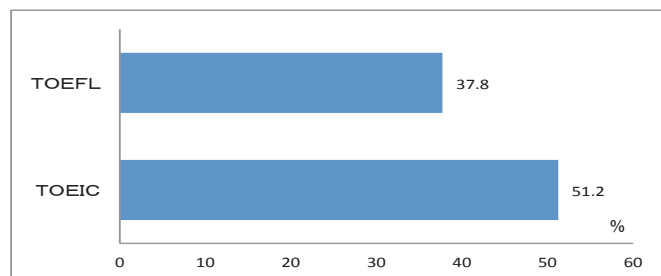
左の図は、前問のAからHの国際活動経験のある者について、その期間を示している。いずれも1ヶ月未満の短期の者が最も高い割合を占めている。

なお、AからHのいずれか一つでも経験がある学生は57.9%、経験がない学生は42.1%となる。しかし、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」学生については、海外旅行など、AからGの国際交流経験とは異なると考えられる。このため、Hの経験のみの学生31.8%を除くと、国際交流経験のある学生は26.1%となる。



「TOEFL 受験者」は37.8%と大幅に増加 「TOEIC 受験者」は51.2%と増加

Q22 あなたは、在学中に TOEFL や TOEIC 等のテストを受験したことがありますか。

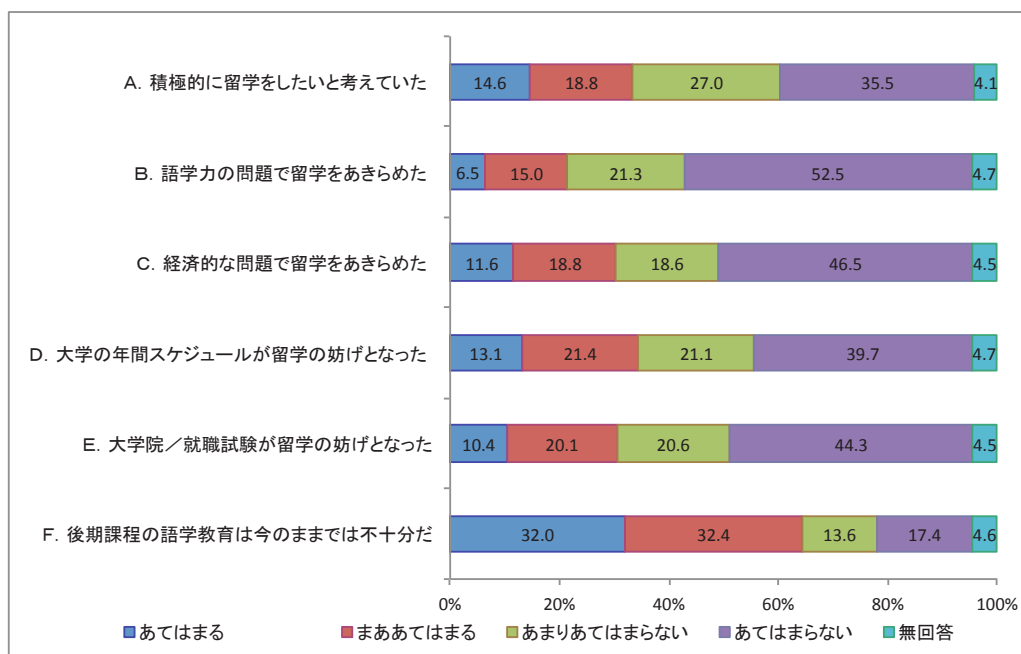


前年度調査は、TOEFL と TOEIC 受験者について、成績をたずねたが、今年度の調査は受験の有無のみたずねた。前年度、TOEFL の受験経験者は22.1%であったが、今回は、37.8%と増加している。

TOEIC についても、前年度は受験経験者が42.9%であったが、今回は51.2%と増加している。

「留学障害」は「大学の年間スケジュール」、「大学院／就職試験」、「経済的問題」、「語学力」の順

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。



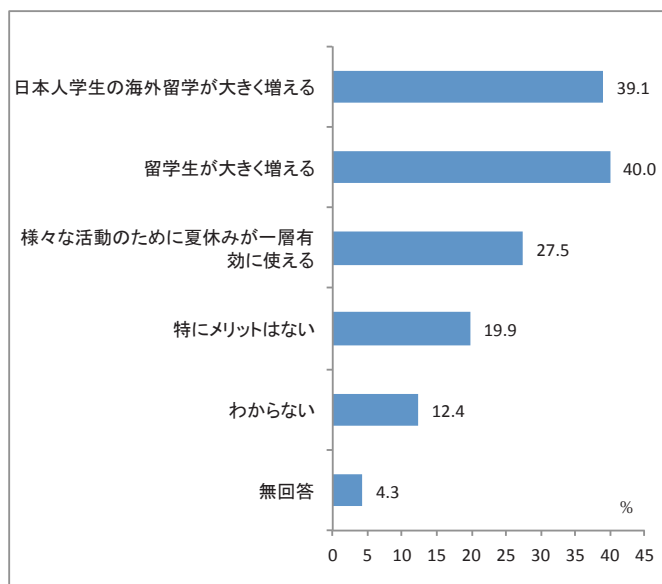
「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」学生は、約2割(21.5%)であるが、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」学生は、3割(30.4%)であり昨年度とほとんど同じ傾向である。昨年度は「大学の年間スケジュールや大学院／就職試験が留学の妨げとなった」とする学生は、約4割(39.7%)となっていたが、これを

「D. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」と「E. 大学院／就職試験が留学の妨げとなった」に分けた。しかし、結果としては、前者にあてはまる割合は34.5%、後者は30.5%とあまり変わらない。また、「F. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする学生も3分の2近く(64.4%)にのぼっている。

「秋季入学」のメリット：「留学生」、「海外留学が多くなる」が4割

秋季入学についておうかがいします。東京大学では、入学時期を国際標準である秋に移すとともに、夏休みを最大限確保することを検討しています(例えば入学時期を9月、夏休みを6～8月とする。)こうした秋季入学の改革案についてあなた自身の経験などをふまえ、以下の質問に教えてください。

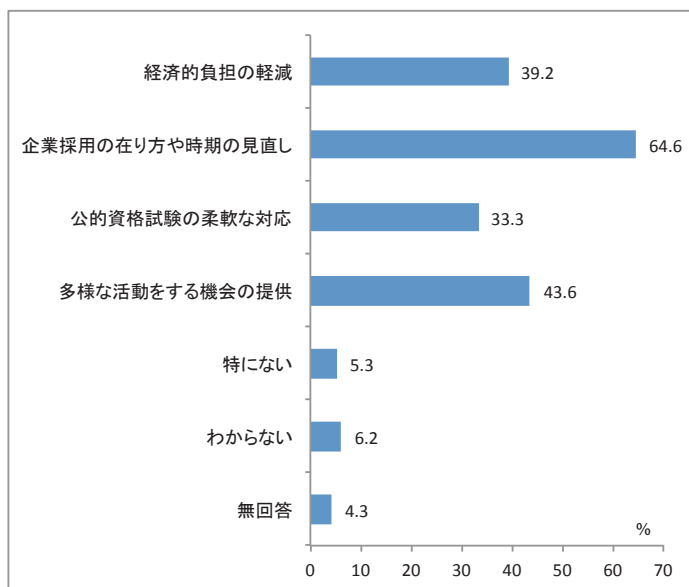
Q24 秋季入学に移行するメリットだと思うものにすべて○をつけてください。



「秋季入学のメリット(複数回答)」では、「留学生が大きく増える」が40.0%と最も高い割合であり、次いで、「日本人学生の海外留学が大きく増える」39.1%となっている。留学に関する項目がメリットとして高い割合を占めている。

「秋季入学」に関して「大学や社会に対して希望すること」： 「企業採用の在り方や時期の見直し」が約3分の2 「多様な活動をする機会の提供」と「経済的負担の軽減」が約4割

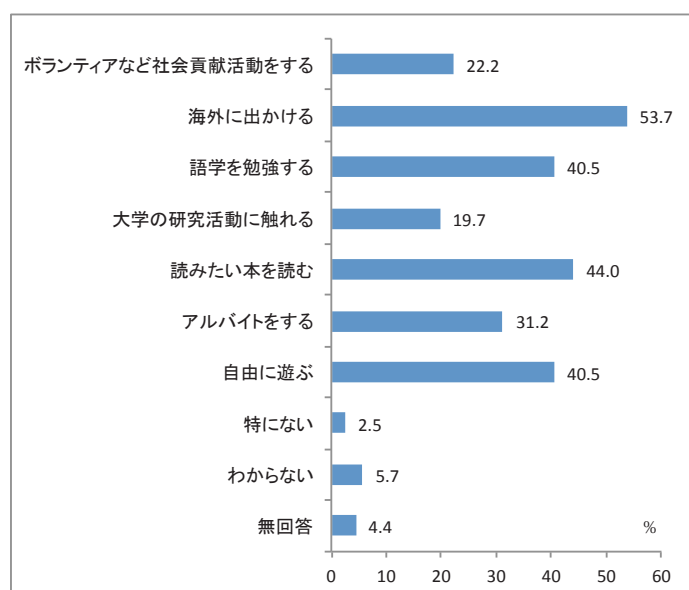
Q25 大学が秋季入学に移行し、高校卒業から就職・大学院進学までの期間が、現在より半年から1年延びる場合、大学や社会に対してどのようなことを希望しますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。



「秋季入学に移行して大学や社会に対して希望すること（複数回答）」では、「企業採用の在り方や時期の見直し」が64.6%と3分の2に近い学生が要望している。次いで、「多様な活動をする機会の提供」43.6%、「経済的負担の軽減」39.2%が高い割合を占めている。

「ギャップターム期間にしたいこと」：「海外に出かける」が半数以上 「読みたい本を読む」と「自由に遊ぶ」と「語学を勉強する」が約4割

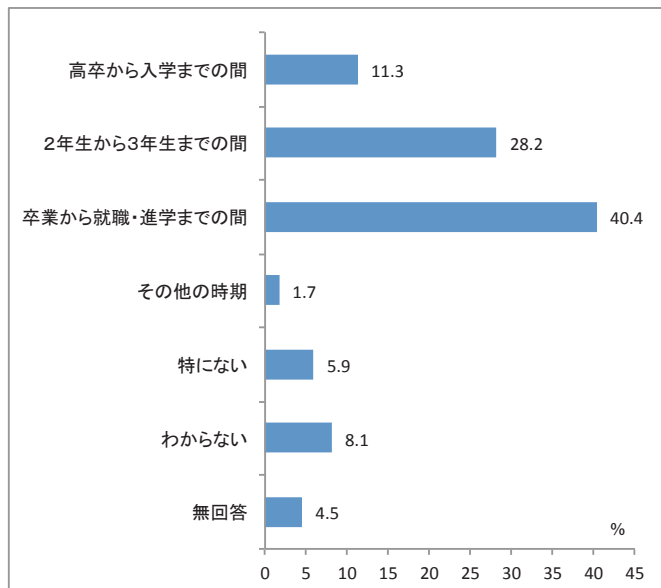
Q26 高校卒業から大学入学までの約半年を、各自が自由に様々な体験活動をする期間（ギャップターム）があったとしたら、あなたは何をしたいですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。



「ギャップターム期間にしたいこと（複数回答）」では、「海外に出かける」が53.7%と最も高い割合を示している。次いで、「読みたい本を読む」44.0%、「自由に遊ぶ」と「語学を勉強する」40.5%となっている。

「希望するギャップタームの時期」：「卒業から就職・進学までの間」が4割 「2年生から3年生までの間」が約3割

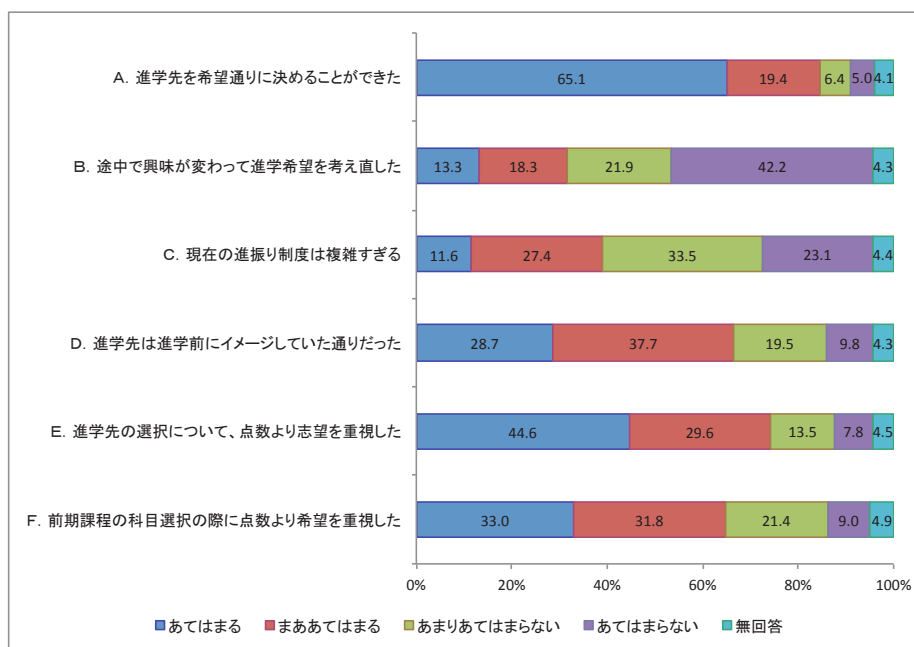
Q27 学期とは別に、ギャップタームのような自由に活動のできる期間（半年～1年）が与えられるとしたら、どのような時期がいいと思いますか。あてはまる番号に○をつけてください。



「希望するギャップタームの時期（単数回答）」では、「卒業から就職・進学までの間」が40.4%と最も高い割合となっており、次いで「2年生から3年生までの間」が28.2%、「高卒から入学までの間」は11.3%と約1割となっている。

「進学先」は「希望通り」が8割以上、「進学希望を考え直した」：約3割

Q28 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。



「A. 進学先を希望通りに決めることができた」学生は、84.5%と8割を超えている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」学生も3割以上(31.6%)となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」学生は、約3分の2(66.4%)となっている。

※今年度の調査で新たに「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」を加えた。「あてはまる」は11.6%、「まああてはまる」は27.4%で合わせて約4割(39.0%)の者が複雑すぎるとしている。

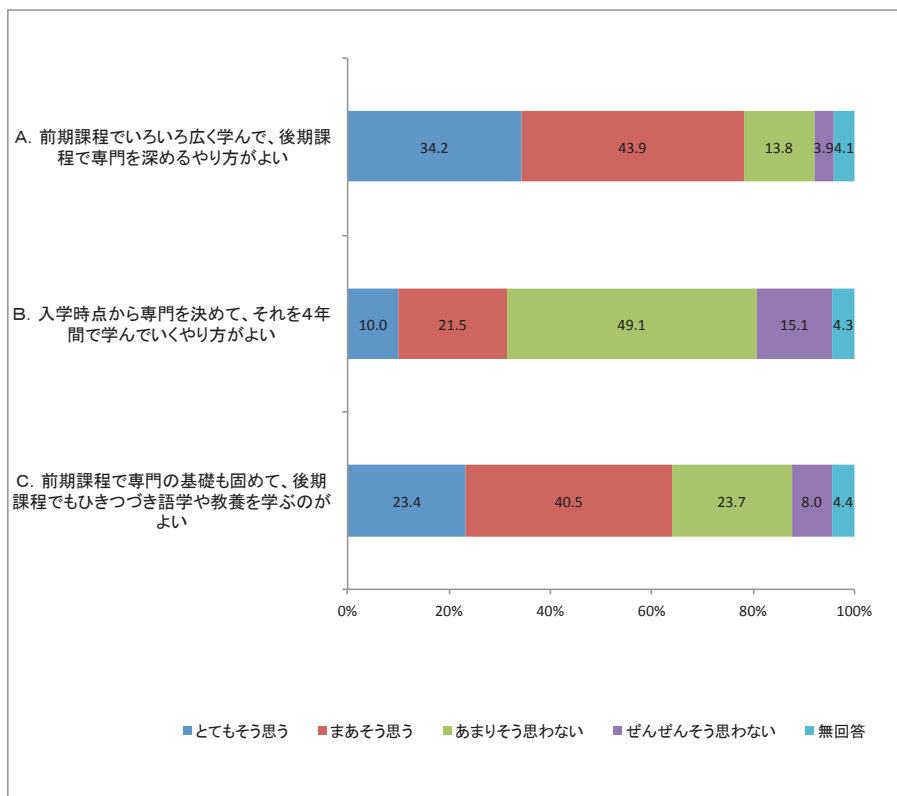
※今年度の調査で新たに「E. 進学先の選択について、点数より志望を重視した」を加えた。「あてはまる」は44.6%、「まああてはまる」は29.6%で合わせて約4分の3(74.2%)の者が「志望を重視した」としている。

※今年度の調査で新たに「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」を加えた。「あてはまる」は33.0%、「まああてはまる」は31.8%で合わせて約3分の2(64.8%)の者が「希望を重視した」としている。

※今年度の調査で新たに「G. 全科類枠で進学したか」を加えた。全科類枠で進学した者の割合は、9.1%となっている(グラフ省略)。

「専門と教養の学習の仕方」については、「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」という現行方式を評価する学生が約8割だが、「後期課程でも語学や教養が必要」という学生も約6割

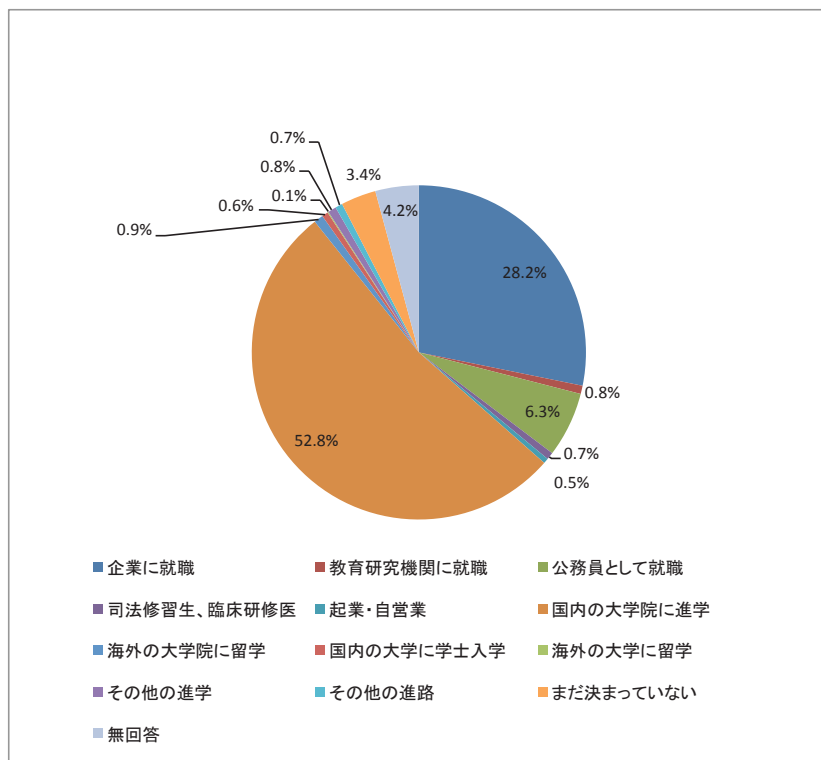
Q29 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。



「専門と教養の学習の仕方について」では、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する学生が、78.1%と8割近い。これに対して、逆に、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する学生は3割(31.5%)となっている。また、両者の中間の方式として「C. 前期課程で専門の基礎も固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学ぶのがよい」とする学生も63.9%と6割を超えている。

「卒業後の予定」：「進学」が半数以上、「就職」が約4割

Q30 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。



働く

1. 企業に就職 (28.2%)
2. 教育研究機関に就職 (0.8%)
3. 公務員として就職 (6.3%)
4. 司法修習生、臨床研修医 (0.7%)
5. 起業・自営業 (0.5%)

学ぶ

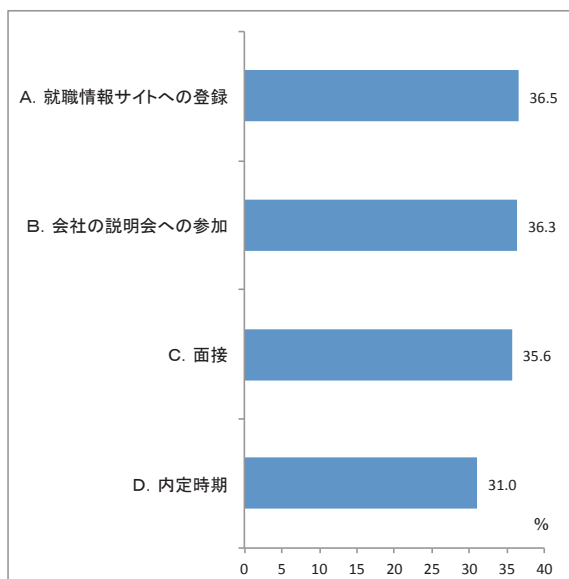
6. 国内の大学院に進学 (52.8%)
7. 海外の大学院に留学 (0.9%)
8. 国内の大学に学士入学 (0.6%)
9. 海外の大学に留学 (0.1%)
10. その他の進学 (0.8%)
11. その他の進路 (0.7%)

未定

12. まだ決まっていない (3.4%)

4月からの予定としては、「国内の大学院に進学」が52.8%と最も多く、「海外の大学院に進学」と合わせて、大学院進学予定は、5割以上(53.7%)となっている。これに対して、「企業に就職」は約3割(28.2%)で、「教育研究機関に就職」0.8%、「公務員として就職」6.3%、「司法修習生、臨床研修医」0.7%、「起業・自営業」0.5%と合わせて就職予定は、約3分の1(36.5%)となっている。進路未定は3.4%ときわめて少ない。

Q31 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には()に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては、「A. 就職情報サイトへの登録」が36.5%と最も高い割合を示しており、以下、「B. 会社の説明会への参加」36.3%、「C. 面接」35.6%となっている。また、「D. 内定時期」に関しては、31.0%が「内定」を受けている。

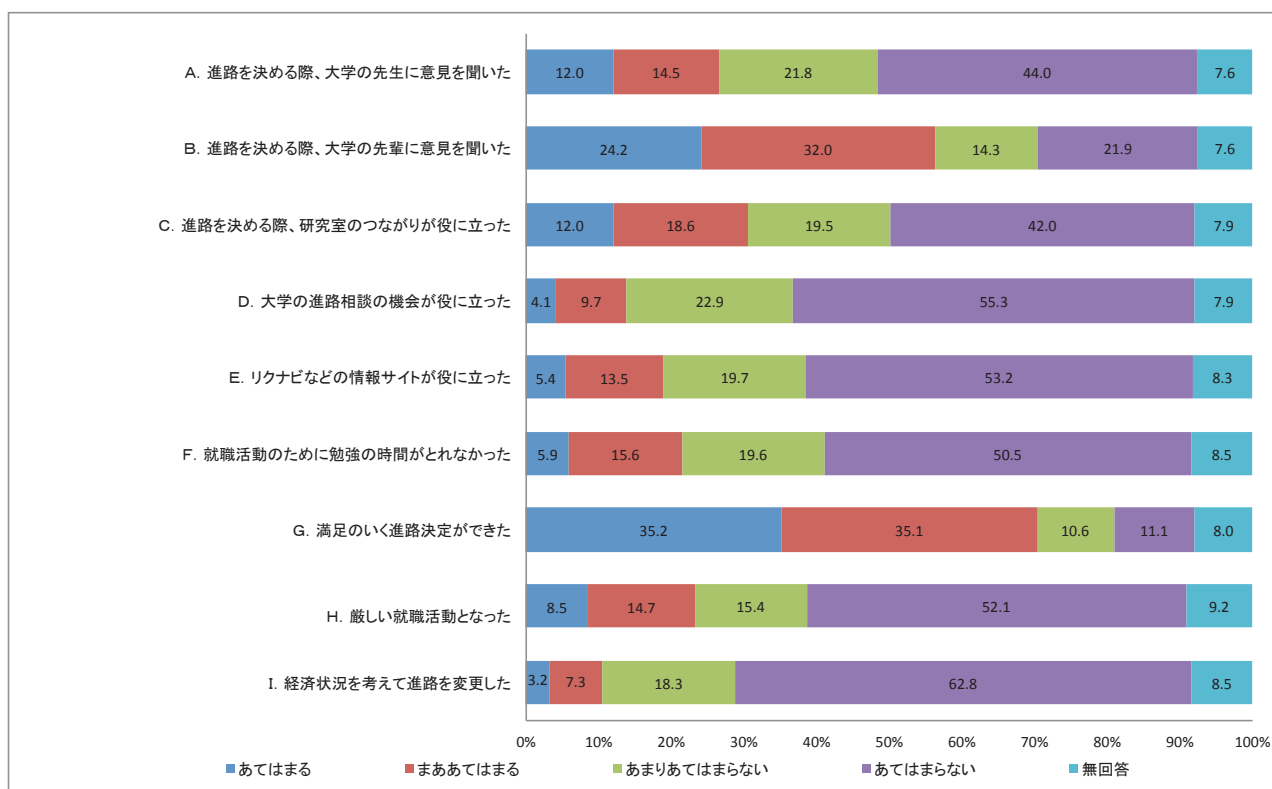
「民間企業への就職活動の時期」は3年生後期に集中

民間企業への就職活動の時期については、下表のように、3年生後期に集中しており、次いで3年生前期となっている。ただし、内定は4年生前期が71.6%と最も高い割合を占めている。

	合計	1年生	2年生	3年生 前期 (4-9月)	3年生 後期 (10-翌3月)	4年生 前期 (4-9月)	4年生 後期 (10-翌3月)	5年生 前期 (4-9月)	5年生 後期 (10-翌3月)	6年生 前期 (4-9月)	6年生 後期 (10-翌3月)	年or月 不明	無回答
A. 就職情報サイトへの登録	100.0	0.1	0.6	38.1	49.2	1.9	4.3	1.2	1.2	-	-	1.0	2.3
B. 会社の説明会への参加	100.0	0.1	0.6	23.9	59.7	2.0	6.6	0.4	1.9	0.1	0.1	1.6	3.0
C. 面接	100.0	0.1	0.2	11.0	41.5	29.9	9.1	1.0	1.5	0.9	-	1.4	3.3
D. 内定時期	100.0	0.1	-	5.0	10.3	71.6	5.5	2.7	1.0	1.7	-	0.5	1.4

「進路決定」：「大学の先輩の意見」が半数以上 7割の学生が「満足のいく進路決定ができた」

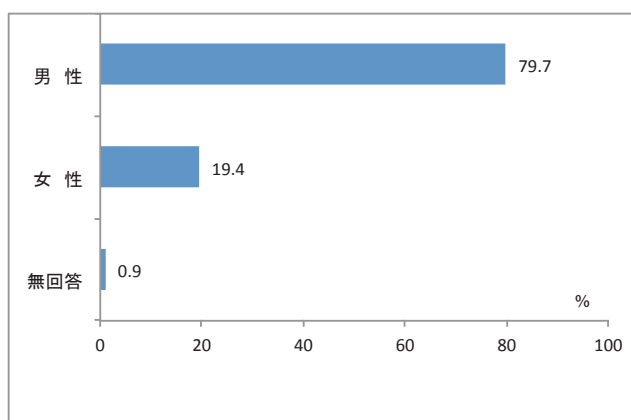
Q32 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「B. 先輩」(56.2%)と半数を超えている。「A. 大学の先生」(26.5%)は約4分の1である。「C. 研究室のつながりが役に立った」(30.6%)のは3割で、「G. 満足のいく進路決定ができた」(70.3%)のは7割となっている。「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」(21.5%)、「H. 厳しい就職活動となった」(23.2%)は、4月からの予定を「Q30 働く」とした者に限ると、どちらも46.8%となる(グラフは省略)。

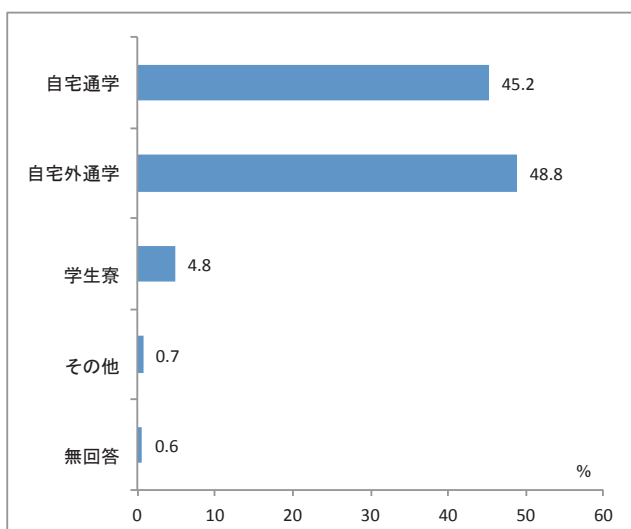
回答者の特性

Q 3 性別



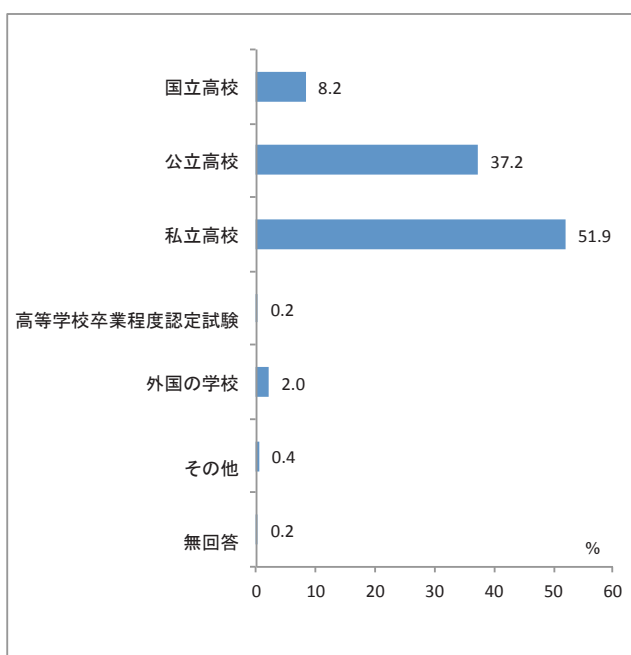
回答者は男性が約8割（79.7%）、女性が約2割（19.4%）となっている。

Q 4 通学



回答者のうち、自宅通学は45.2%、自宅外通学は48.8%で、学生寮は4.8%と少ない。

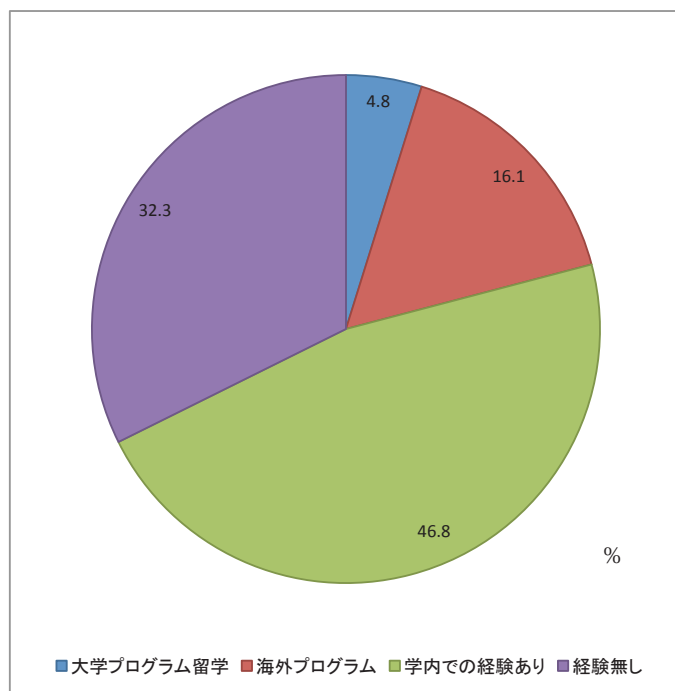
Q 5 出身高校



回答者のうち、過半数（51.9%）は私立高校出身で、次いで公立高校が37.2%、国立高校が8.2%となっている。

国際活動経験と身につけた能力の関連

「国際活動経験」の4タイプ



国際化は東京大学の最大の課題の一つである。国際化の進展のための基礎的な知見として、学生の国際活動経験は学生にどのような影響を与えているか、あるいは国際活動経験を持つ学生はどのような特徴をもっているのか、を明らかにすることは重要である。ここでは、今回の達成度調査から国際活動経験を4つのタイプに分け、上記の国際活動の影響や国際活動経験を持つ学生の特徴を検証する。

1. 国際活動経験を、Q18とQ21の設問への回答（8～10頁）から次の4つの類型に分ける。上図はそれぞれのタイプの割合を示している。

(1) <大学プログラム留学>

「Q21 Aの大学プログラム留学／推薦により留学した」者で、最もフォーマルな留学経験を持つと言える。このタイプは119名（4.8%）である。以下では<大学プログラム留学>と略記する。

(2) <海外プログラム>

以下のQ21のいずれかのみ経験者で、学外の国際活動経験がある者で、397名（16.1%）が該当する。以下では、<海外プログラム>と略記する。なお、Q21の「H. 上記以外に海外に行った経験がある」学生については、海外旅行など、AからGの国際交流経験とは異なると考えられる。このため、Hの経験のみの学生を除いた。

Q21 B 個人留学した（語学学習）

Q21 C 個人留学した（語学学習以外）

Q21 D 海外でインターンシップに参加した

Q21 E 海外でボランティアに参加した

Q21 F 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した

Q21 G 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した

(3) <学内での経験あり>

以下のQ18の学内の国際活動のみに参加した者で、1,154名（46.8%）と半数近くを占めている。以下では、<学内での経験あり>と略記する。

Q18 E 東大で語学以外の英語による授業を受講した

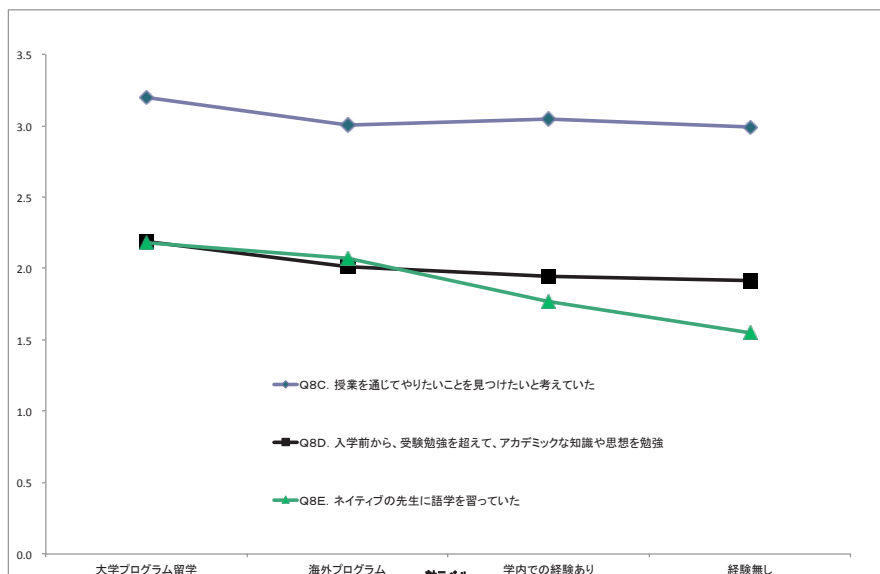
Q18 G 学内の留学生とのつきあいがある

Q18 H それ以外の国際交流活動を行った（外国人留学生等の支援等も含む）

(4) <経験無し>

上記のいずれの国際活動の経験を持たない者で、798名（32.3%）と約3分の1を占めている。以下では<経験無し>と略記する。

「入学前の経験」との関連

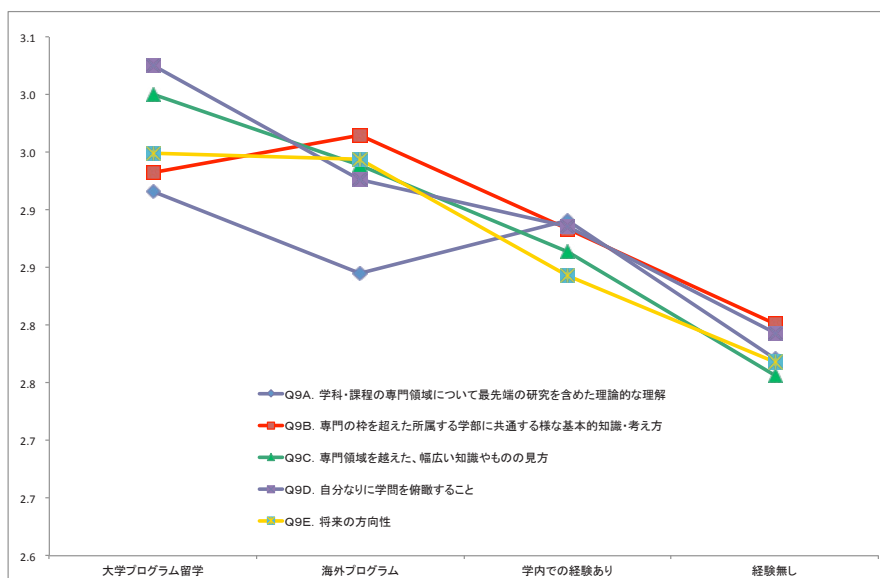


(注) あてはまる=4, まああてはまる=3, あまりあてはまらない=2, あてはまらない=1の平均

F検定 P<0.1 以下同じ

これに対して、「授業を通じてやりたいことを見つけたいと考えていた」と「入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想を勉強」していた者は、いずれも<大学プログラム留学>のみが他より高くなっているのが注目される。

「身につけた能力」と強い関連 (1)



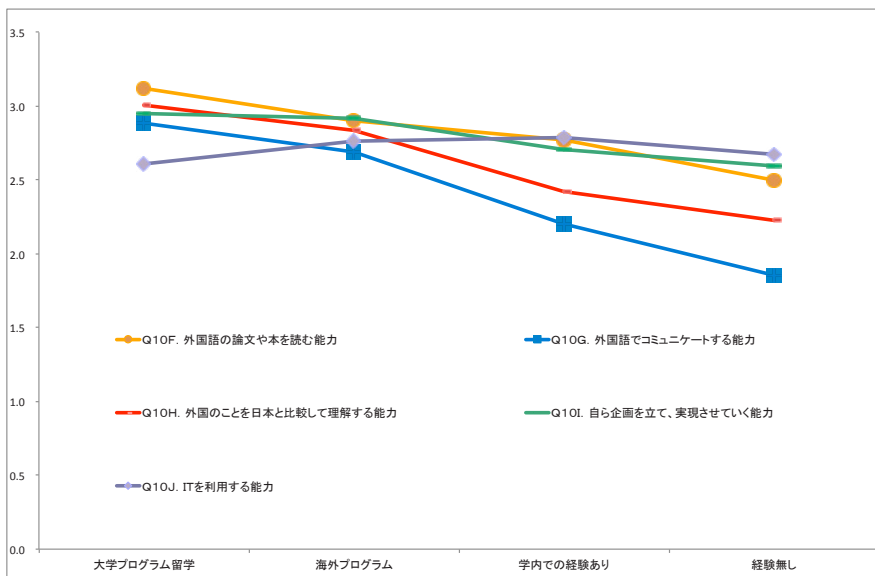
(注) 身についた=4, まあ身についた=3, あまり身につけていない=2, 身につけていない=1の平均

の方が高くなっている。これに対して「専門の枠を超えた所属する学部に通ずる様な基本的な知識・考え方」では<海外プログラム>の方が<大学プログラム留学>よりも高くなっている。しかし、この場合でも、海外での国際活動経験者の方が<学内での経験あり>や<経験無し>よりも高くなっている。このように、海外での国際活動の経験は、身につけた能力に大きな効果をあげていると言えよう。

図のように、国際活動経験の有無によって、大きな相違が見られるのは、「ネイティブの先生に語学を習っていた」について、<大学プログラム留学>は、あてはまる=4, まああてはまる=3, あまりあてはまらない=2, あてはまらない=1の平均が2.18と最も高く、次いで<海外プログラム>が2.07と続き、<学内での経験あり>は1.77、<経験なし>は1.55と次第に低くなっている。入学以前から、国際活動を志向する者は準備をしている割合が高いと言えよう。

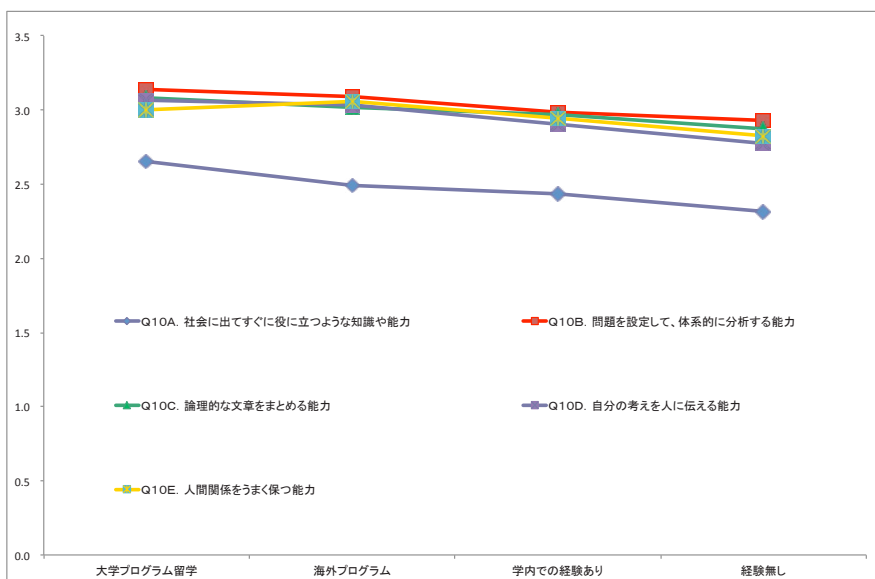
身につけた能力と国際活動経験は密接な関連が見られる。図のように、<大学プログラム留学>は「自分なりに学問を俯瞰すること」や「専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」や「学科・課程の専門領域について最先端の研究を含めた理論的な理解」や「将来の方向性」のいずれの項目でも最も高くなっている。また、「自分なりに学問を俯瞰すること」や「専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」では、海外での国際活動経験者

「身につけた能力」と強い関連（2）



(注) 身についた=4, まあ身についた=3, あまり身につけていない=2, 身につけていない=1の平均

前問と同様に、様々な身につけた能力（自己評価）でも国際活動の経験は大きな効果を持っている。左図のように、「外国語の論文や本を読む能力」、「外国語でコミュニケーションする能力」、「外国のことを日本と比較して理解する能力」、「自ら企画を立て、実現させていく能力」のいずれも、＜大学プログラム留学＞、＜海外プログラム＞、＜学内での経験あり＞の順で、＜経験無し＞が最も低くなっている。



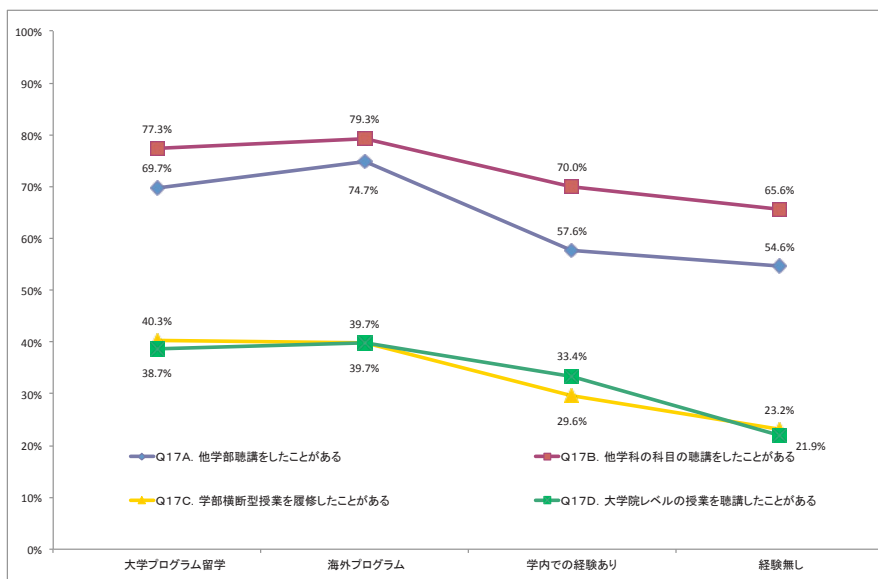
(注) 身についた=4, まあ身についた=3, あまり身につけていない=2, 身につけていない=1の平均

左図のように、「社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」、「問題を設定して体系的に分析する能力」、「論理的な文章をまとめる能力」、「自分の考えを人に伝える能力」のいずれも、＜大学プログラム留学＞が最も高く、次いで、＜海外プログラム＞、＜学内での経験あり＞で、＜経験無し＞が最も低くなっている。「人間関係をうまく保つ能力」では、＜海外プログラム＞の方が＜大学プログラム留学＞よりやや高いが、ほと

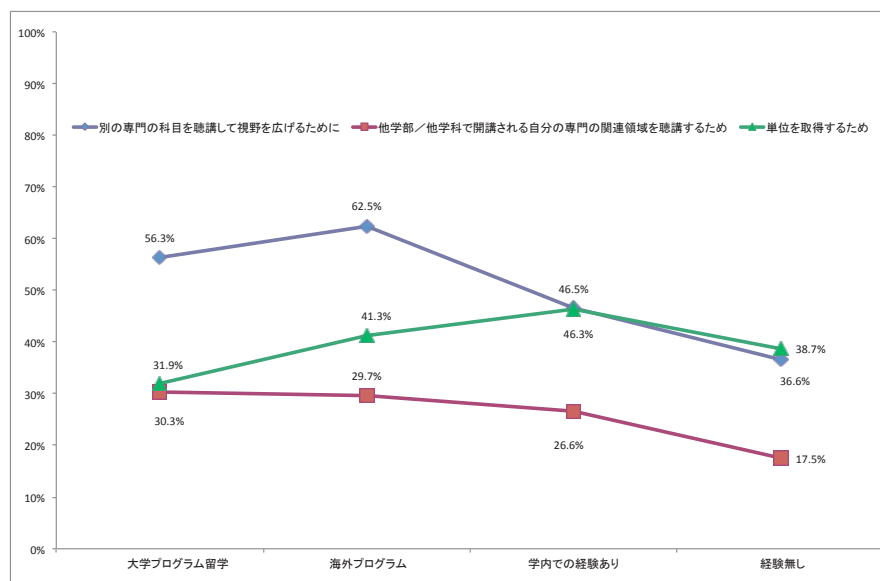
んど差はない。図ではあまり差がないようにみえるかもしれないが、いずれも統計的には有意である。

このように、国際活動の経験は身につけた能力に大きな効果を与えていると言えよう。ただし、これらは相関関係を示しているだけで、逆の場合があり得ることに注意しなければならない。つまり、もともと能力の高い者が国際活動を行ったという可能性である。

「国際活動経験」者は「他学部聴講」等にも積極的

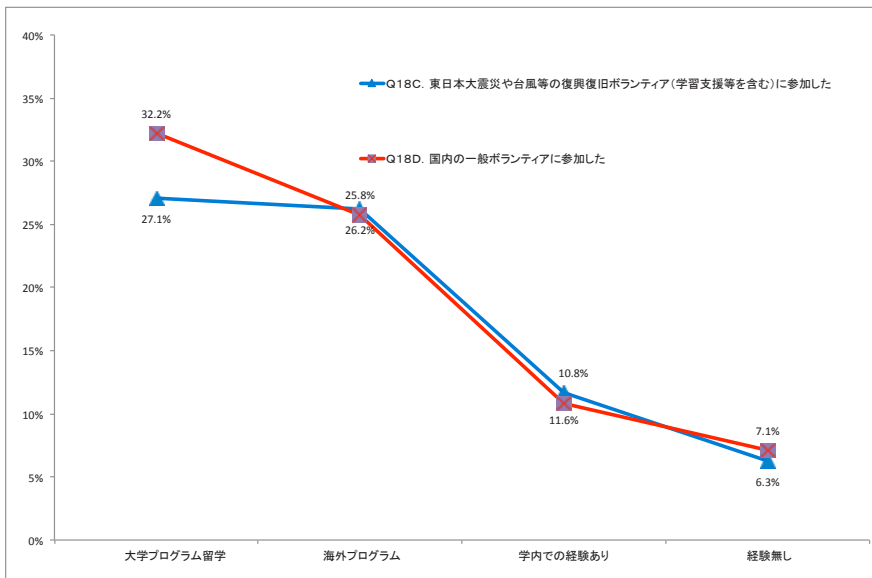


国際活動経験者は他学部聴講などについても積極的である。左図のように、「他学部聴講」と「他学科聴講」と「大学院レベルの授業」については、＜海外プログラム＞、＜大学プログラム留学＞、＜学内での経験あり＞、＜経験無し＞の順となっている。また、「学部横断型授業」では、＜大学プログラム留学＞、＜海外プログラム＞、＜学内での経験あり＞の順で、＜経験無し＞が最も低くなっている。



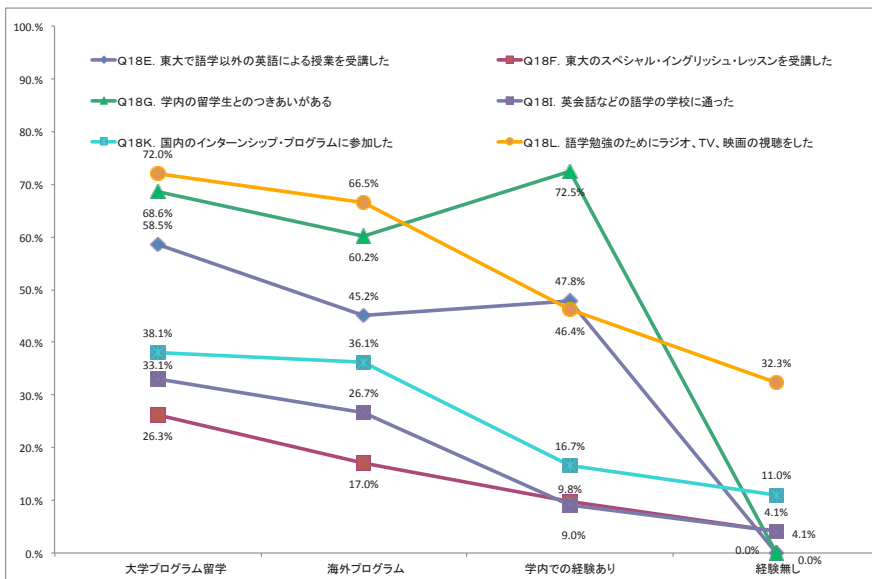
また、他学部聴講などの理由についても左図のように、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」が高い割合を示しており、「単位を取得するため」が少ない。国際活動経験者は、他学部・他学科聴講についても、積極的な姿勢が見いだされる。

「国際活動経験」のある者は「ボランティア」にも積極的



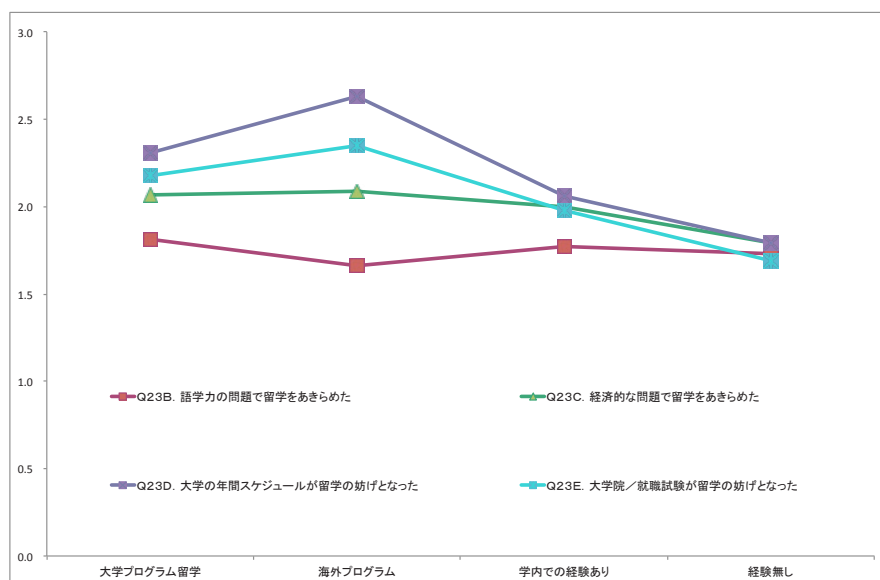
国際活動経験者はボランティアなどにも参加している割合が高い。左図のように、＜大学プログラム留学＞では、「国内の一般ボランティア」割合は32.2%で、「東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等を含む)に参加した」割合も27.1%となっている。これに対して、＜学内での経験あり＞ではいずれも約10%、＜経験無し＞では、それぞれ6.3%と7.1%と低くなっている。国際活動経験者はボランティア活動にも積極的な者が多くなっている。

国際活動経験のある者は在学中の語学などの学習にも積極的



国内の在学時の国際活動に関連した学習機会・経験については、左図のように、「学内での留学生とのつきあいがある」では、＜学内での経験あり＞が最も高いが、それ以外の「東大のスペシャル・イングリッシュ・レッスンを受講」、「英会話などの語学の学校に通った」、「国内のインターンシップ・プログラムに参加した」、「語学勉強のためにラジオ、TV、映画の視聴をした」のいずれも、＜大学プログラム留学＞、＜海外プログラム＞、＜学内での経験あり＞、＜経験無し＞の順で、国際活動経験者が在学時も積極的に学習していることを示している。また、「東大で語学以外の英語による授業を受講した」は、＜大学プログラム留学＞が最も高いが、次いで＜学内での経験あり＞であまり差はないが、＜海外プログラム＞が続き、＜経験無し＞は定義からいずれの活動も経験していない。

「留学の障害」：「大学の年間スケジュール」と「大学院／就職試験」で、 ＜海外プログラム＞の割合が最も高い



(注) あてはまる=4, まああてはまる=3, あまりあてはまらない=2, あてはまらない=1の平均

留学の障害については、「語学力」、「経済的な問題」、「大学の年間スケジュール」、「大学院／就職試験」の4つについてたずねているが、左図のように、＜経験無し＞を除く、どのタイプでも「大学の年間スケジュール」と「大学院／就職試験」で、＜海外プログラム＞の割合が最も高い。これに対して、「経済的な問題」は＜経験無し＞、「語学力」については、＜海外プログラム＞で低くなっている以外には、

どのタイプでも統計的には有意であるが、あまり差は見られない。留学の障害としては、「大学の年間スケジュール」や「大学院／就職試験」など、「語学力」や「経済的な問題」以外の障害も大きいことが示唆される。

「国際活動経験」の効果

国際活動の経験は学生の身につけた能力と強い関連を示している。「外国語の論文や本を読む能力」や「外国語でコミュニケーションする能力」、「外国のことを日本と比較して理解する能力」などを身につけた者の割合が高いだけでなく、専門、幅広い知識やものの見方、学問の俯瞰、将来の方向性についても、＜大学プログラム留学＞、＜海外プログラム＞経験者は身につけた割合が高い。さらに、「社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」、「問題を設定して、体系的に分析する能力」、「論理的な文章をまとめる能力」、「自分の考えを人に伝える能力」、「人間関係をうまく保つ能力」、「自ら企画を立て、実現させていく能力」についても、＜大学プログラム留学＞と＜海外プログラム＞経験者は、他のタイプより高い。このように、身につけた能力と国際活動経験は密接に関連しているが、この関連は、必ずしも因果関係ではない可能性があることにも注意しなければならない。すなわち、国際活動経験によって、これらの能力を身につけたのか、もともとこうした能力のある者が国際活動に積極的に参加していたかは、今後さらに検討する必要がある。

これに関連して、国際活動経験者は、入学以前や在学時に国際活動の準備をしており、さらに、他学部・他学科聴講やボランティアなどにも積極的である。国際活動経験そのものだけでなく、それに関連した活動や積極的な姿勢が、身につけた能力にも効果を持っていると考えられる。同様のことは、他学部・他学科聴講や、ボランティアなどの活動についても言えるかもしれない。

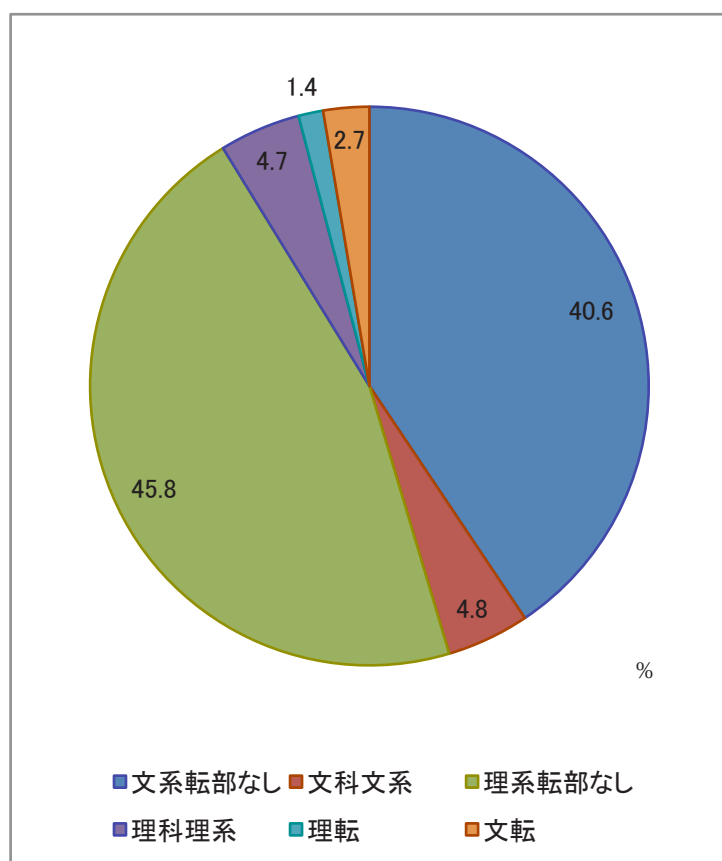
いずれにせよ、今回の分析では、国際活動経験が身につけた能力の自己評価と強い関連を持つことが明らかにされた。これが今回の調査に限られたことなのか、それとも安定的な傾向であるのか、さらに検証していく必要がある。

転部と身についた能力との関連

入学時の科類に関わらず、どの学部にも進学可能な進学振分け制度は東京大学の教育の大きな特徴である。あらかじめ想定されている進学学部そのまま進学しないことをここでは「転部」と呼ぶことにする。なお、「転部」とは本来は学部から学部への移動を意味するが、ここでは科類から学部への変更を指す言葉として用いる。「傍系進学」という言い方をされることがある。

本章では、この転部の経験と身についた能力の関連を検証する。転部、とりわけ文科から理系学部、あるいは理科から文系学部への転部は、学生の履修には大きな負担となると考えられるが、学習に幅の広さが生じるとみられる。こうした転部をした学生と身につけた能力との関連を今回の達成度調査から分析する。また、転部をした学生は転部をしなかった学生に比べてどのような特徴があるのかについてもあわせて検討する。

転部による学生の6タイプ



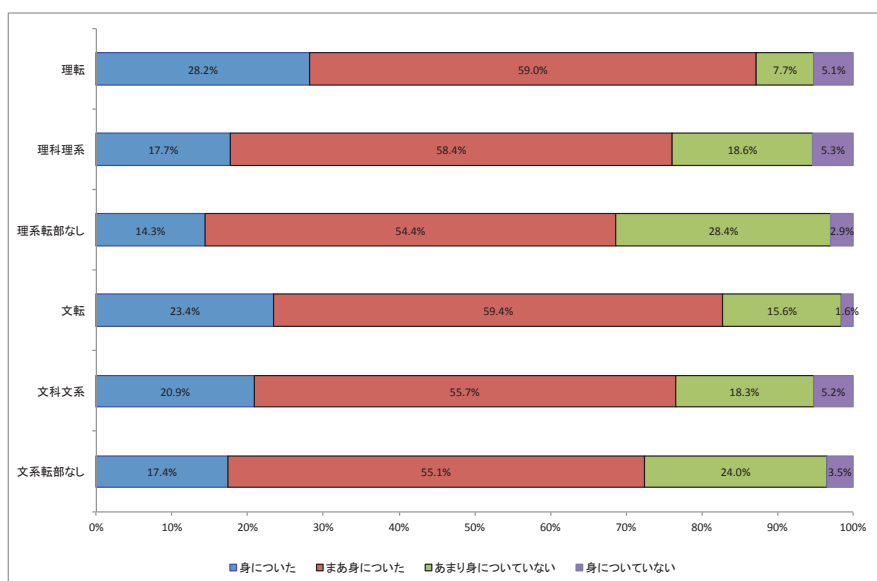
ここでは、転部に関連して学生を次の6つのタイプに分けた。

- (1) <文系転部なし> 文科から文系学部に進学した者（あらかじめ想定している進学学部そのまま進学した者（例 文Iから法学部）（40.6%）
- (2) <文科文系> 文科から文系学部に進学した者（4.8%）
- (3) <文転> 理科から文系学部に進学した者（2.7%）
- (4) <理系転部なし>（45.8%）
- (5) <理科理系> 理科から理系へ進学した者（4.7%）
- (6) <理転> 文科から理系学部へ進学した者（1.4%）

なお、教養学部など、理系と文系の混在している学部の場合には、所属している学科等から、それぞれ個々の学生を上記のタイプにあてはめた。また、理Iから医学部や農学部、理II、理IIIから工学部などは、<理科理系>とした。

以下の分析は、あくまで今回の調査データから得られた結果であり、特に、<文転>は65名、<理転>は35名と少ないため、結果を一般化することは注意する必要がある。今回は特に注目される結果のみ示した。

転部者は「専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」を身につけた割合が高い

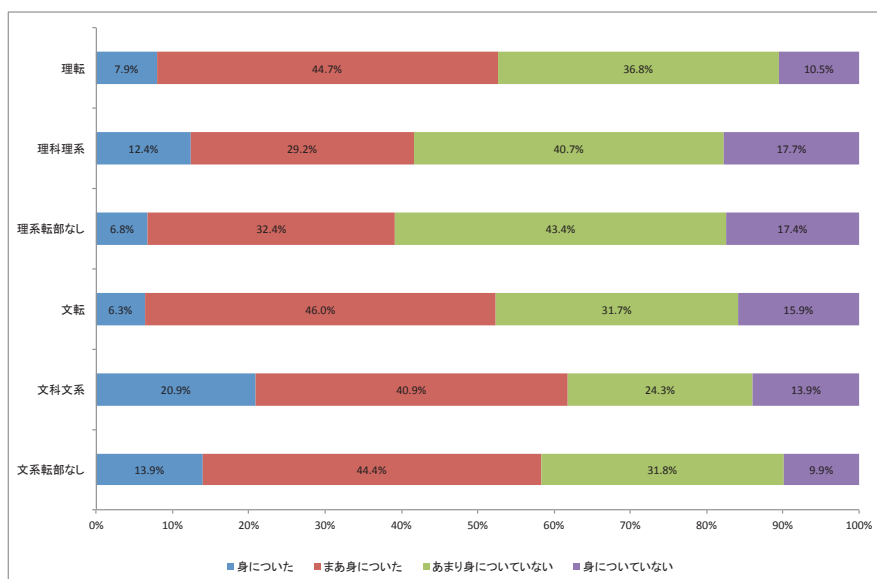


(注) χ 自乗検定 $P < 0.1$, 以下同じ

ている。また、〈理科理系〉は 17.7%と 58.4%で合わせて 76.1%、〈文科文系〉はそれぞれ 20.9%と 55.7%で合わせて 76.6%と、転部なしと〈文転〉、〈理転〉の中間的な割合となっている。これは、先にふれたように、転部とりわけ〈文転〉と〈理転〉が幅広い学習を必要とすることから予想された結果である。

〈文転〉、〈理転〉をした者の方が、転部なしの者より、「専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」を身につけた割合が高くなっている。左図のように、〈文転〉では、「身につけた」23.4%、「まあ身につけた」59.4%で、合わせて 82.8%が身につけたと答えている。これに対して、〈文系転部なし〉では、それぞれ 17.4%と 55.1%で合わせて 72.5%、〈理系転部なし〉では、それぞれ 14.3%と 54.4%で合わせて 68.7%となっ

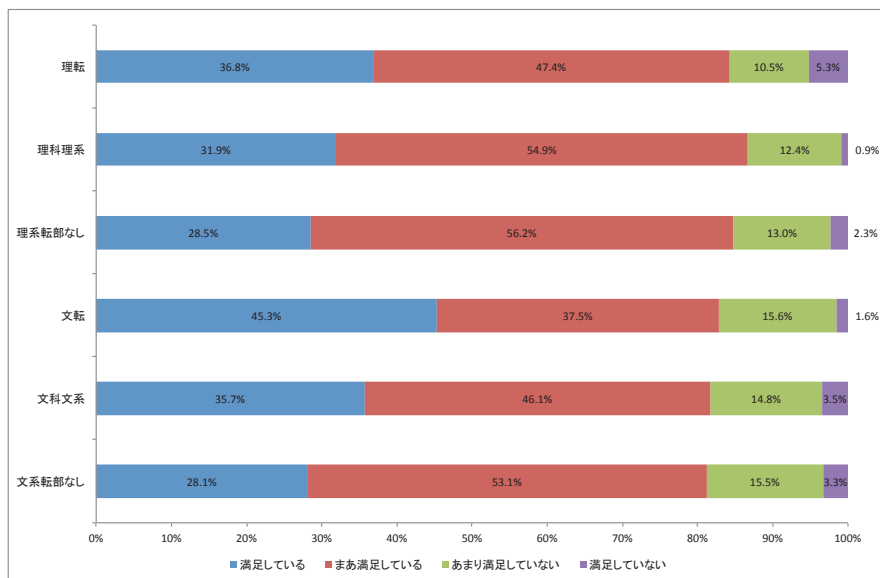
「外国のことを日本と比較して理解する能力」：〈文転〉は〈文系転部なし〉より低く、〈理転〉は〈理系転部なし〉より高い



と 40.9%、合わせて 61.8%より、身につけた者の割合が低くなっている。しかし、〈理転〉はそれぞれ 7.9%と 44.7%で合わせて 52.6%と〈理系転部なし〉より高くなっている。このように、理系と文系では、転部の有無による「外国のことを日本と比較して理解する能力」への影響は異なっている。

「外国のことを日本と比較して理解する能力」については、左図のように、理系より文系の方が身につけた者の割合が高くなっている。〈理系転部なし〉ではそれぞれ 6.8%、32.4%、合わせて 39.2%に対して、〈文系転部なし〉では、それぞれ 13.9%、44.4%合わせて 58.3%と高くなっている。これに対して、〈文転〉(6.3%、46.0%、合わせて 52.3%)は〈文系転部なし〉や〈文科文系〉(20.9%と 40.9%、合わせて 61.8%)より、身につけた者の割合が低くなっている。しかし、〈理転〉はそれぞれ

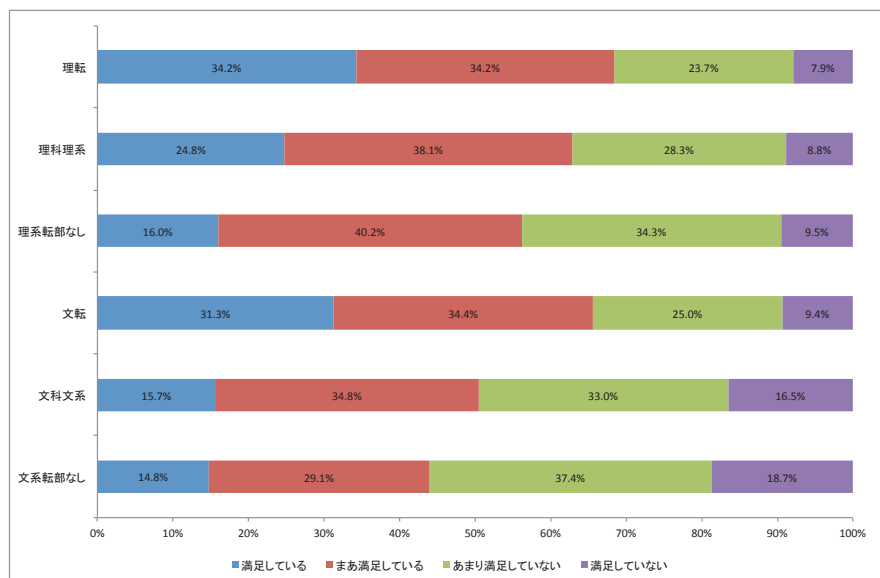
転部者は「後期課程で学んだこと」の満足度が高い



「後期課程で学んだこと」に関しても、転部なしよりも転部した者の方が「満足している」割合は高くなっている。左図のように、＜文系転部なし＞では、「満足している」28.1%に対して、＜文科文系＞は35.7%、＜文転＞は45.3%となっている。理系についても、＜理系転部なし＞は28.5%に対して、＜理科理系＞は31.9%、＜理転＞は36.8%と、文系と同じように「満足している」者の割合が高くなっている。ただし、「満足している」と「まあ満足している」を合わせた者の割合は、いずれのタイプでも約8割であり差は見られない。

と「まあ満足している」を合わせた者の割合は、いずれのタイプでも約8割であり差は見られない。

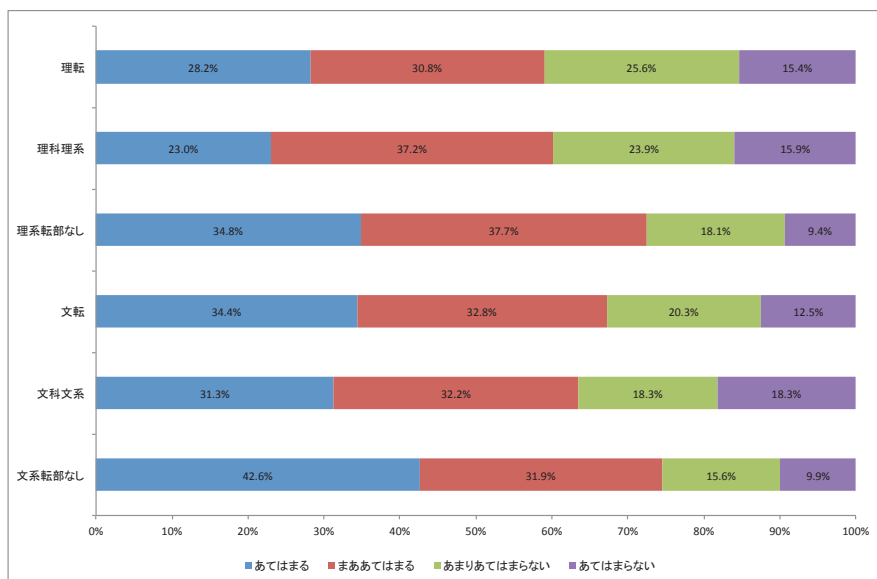
転部者は「授業外での教員との接触」の満足度の割合が高い



転部経験者が後期課程の「満足している」者の割合が高いことについて、幾つかの原因が考えられるが、ひとつには、「授業外での教員との接触」の満足度の割合が高いことがあげられる。左図のように、＜文系転部なし＞では、「満足している」14.8%に対して、＜文科文系＞では15.7%、＜文転＞では31.3%となっており、「満足している」者の割合は転部経験者の方が高くなる。理系でも同様に、＜理系転部なし＞では、「満足している」16.0%に対して、＜理科理系＞は24.8%、＜理転＞は34.2%と高くなっている。

ただし、前問同様、「満足している」と「まあ満足している」を合わせた割合にはほとんど差がない。

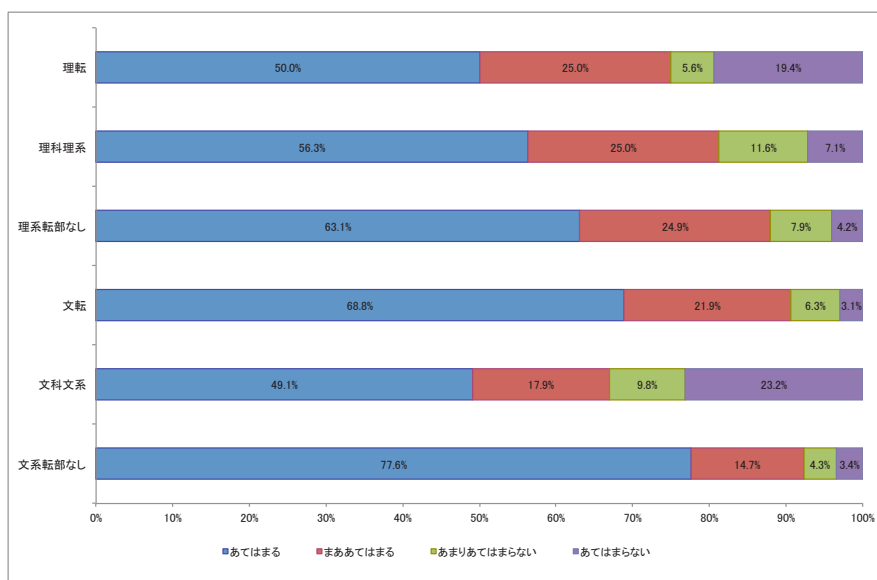
転部者は「入学時点に戻るとしたら、今の専門を選ぶ」割合が必ずしも高くない



「入学時点に戻るとしたら、今の専門を選ぶ」という質問に関しては、転部した者の肯定する者の割合は必ずしも高くない。左図のように、＜文系転部なし＞では、42.6%と31.9%で合わせて74.5%と約4分の3が肯定的であるのに対して、＜文転＞ではそれぞれ34.4%と32.8%で合わせて67.2%、＜文科文系＞では31.3%と32.2%で合わせて63.5%、とやや低くなっている。＜理系転

部なし＞ではそれぞれ34.8%と37.7%で合わせて72.5%に対して、＜理科理系＞ではそれぞれ23.0%と37.2%で合わせて60.2%、＜理転＞では28.2%と30.8%で合わせて59.0%と低くなっている。このように、転部した者は必ずしもそれを肯定的に評価しているわけではない。

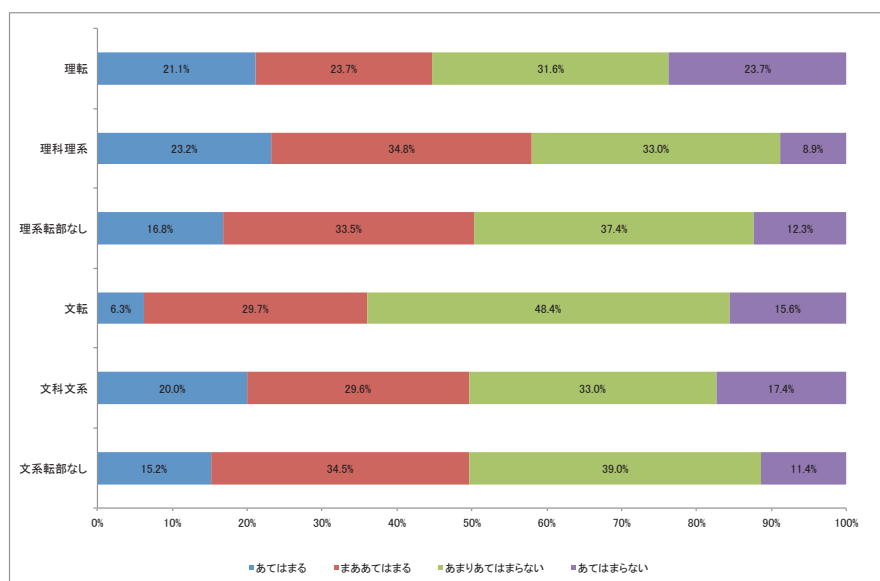
理転は「進学先を希望通り決めることができた」割合が低い



また、「進学先を希望通り決めることができた」について、転部経験者の方が、肯定的な回答をする者の割合は低くなっている。左図のように、＜理系転部なし＞は、それぞれ63.1%と24.9%で合わせて88.0%に対して、＜理科理系＞では56.3%と25.0%、合わせて81.3%と、やや低くなっている。＜理転＞では、それぞれ50.0%と25.0%、合わせて75.0%とさらに低くなっている。

＜文系転部なし＞は、「あてはまる」77.6%と4分の3以上が肯定的で、「まああてはまる」14.7%を加えると92.3%が肯定的である。これに対して、＜文科文系＞ではそれぞれ49.1%と17.9%で合わせて67.0%と肯定的な回答の割合が低くなっている。逆に「あてはまらない」という回答は23.2%で最も高くなっている。また、＜文転＞では、それぞれ68.8%と21.9%、合わせて90.7%と、＜文系転部なし＞よりやや低くなっている。このように、転部は必ずしも希望通りになっているわけではないことが注目される。

転部者は「大学の途中でやる気が削がれてしまった」割合は低い



このように転部者は、転部を必ずしも肯定的にとらえているわけではないが、「大学の途中でやる気が削がれてしまった」という質問に対しては、左図のように、〈理系転部なし〉では、それぞれ16.8%と33.5%と合わせて50.3%、〈文系転部なし〉は、それぞれ15.2%と34.5%で合わせて49.7%と、いずれも約半数がやる気が削がれてしまったとい

う経験を持っている。これに対して、〈理科理系〉ではそれぞれ23.2%と34.8%、合わせて58.0%とやや高くなっているが、〈理転〉ではそれぞれ21.1%と23.7%、合わせて44.8%、〈文転〉ではそれぞれ6.3%と29.7%、合わせて36.0%と転部なしよりも低くなっている。

転部と「身につけた能力」・転部した学生の特徴

東京大学の教育の大きな特徴のひとつは進学振り分け制度により転部が可能となっていることである。転部、とりわけ理科から文系学部、文科から理系学部と理系と文系を越えた転部は、今回の調査結果で見ると、学生に「専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」を身につける効果を持っている。ただし、「外国のことを日本と比較して理解する能力」については、〈文転〉は〈文系転部なし〉より、この評価は低い、理系では逆に高くなっている。このように身につけた能力の内容によって、転部はプラスの効果もマイナスの効果も持ちうると思われる。

また、「後期課程で学んだこと」については、転部者の方が「満足している」者の割合が高い。その理由の一つとして「授業外での教員との接触」の満足度が高いことがあげられる。

しかし、「入学の時点に戻るとしたら、今の専門を選ぶ」という転部の評価について、転部者は必ずしも肯定的な評価をしていない。このことと関連して、「進学先を希望通りに決められなかった」割合は〈文転〉を除いて、転部者の方が高くなっている。しかし、「大学の途中でやる気が削がれてしまった」という否定的な経験については、転部者の方が低くなっている。

このように転部は身につけた能力についてもプラスとマイナスの影響を与えているばかりでなく、転部者の特徴も複雑である。これが今回の傾向なのか、一般的にあてはまるのか、今後さらに検証が必要である。

大学総合教育研究センター ホームページ：<http://www.he.u-tokyo.ac.jp/>
 問い合わせ：大学改革基礎調査部門 担当：小林・劉 (enq@he.u-tokyo.ac.jp) まで



この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、大学総合教育研究センターを通じて行ってください。

東京大学広報室

no.1436 2013年3月11日

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学総合教育研究センター
大学改革基礎調査部門
e-mail : enq@he.u-tokyo.ac.jp